北海学園大学人文学部日本文化学科　丸島ゼミ機関誌

ISSN 2436－3332

紐　帯

第 3 号

今号のテーマ　美術館×やさしい日本語

目次

● 2022年度のゼミ活動について ・・・・・・・・ 4

美術館×やさしい日本語

はじめに ・・・・・・・・ 5

やさしさとは ・・・・・・・・ 6

● 中村善策《海港の秋》 ・・・・・・・・ 7

● 一原有徳《TOK(es)》 ・・・・・・・・16

● 一原有徳《SIY'92》 ・・・・・・・・17

● 工藤三郎《海の幸》 ・・・・・・・・19

● 大月源二《走る男》 ・・・・・・・・22

● 筆谷等観《星籟》 ・・・・・・・・25

● 山田義夫《晩稲》 ・・・・・・・・26

● 小松清《穹》 ・・・・・・・・28

● 本間聖丈《蝦夷錦》 ・・・・・・・・30

美術館とやさしい日本語 ・・・・・・・・33

- 小樽派（おたるは） ・・・・・・・・34
- 北海道洋画発祥の地（ほっかいどうようがはっしょうのち） ・・・・・・・・36
- 小樽と創作版画（おたるとそうさくはんが） ・・・・・・・・39

みる、ことばにする ・・・・・・・・41

- 小樽運河（おたるうんが）について ・・・・・・・・42
- 娘（むすめ）を描（えが）いた作品（さくひん）について ・・・・・・・・44

ちがいを知（し）る ・・・・・・・・46

- どの文字（もじ）が読（よ）みやすいですか。 ・・・・・・・・47
- どの高（たか）さがみやすいですか。 ・・・・・・・・49

振り返りレポート

- やさしい日本語の可能性（足立 夏萌） ・・・・・・・・52
- やさしい日本語の使い方（小野 佑香） ・・・・・・・・54
- 日本文化専門演習Ⅱ最終レポート（坂本 彩華） ・・・・・・・・55
- 日本文化専門演習で学んだこと（新谷 光静） ・・・・・・・・57
- 日本文化専門演習　期末レポート（南原 あこ） ・・・・・・・・59
- やさしい日本語について学んだこと（八田 愛生） ・・・・・・・・60
- 大学生と〈やさしい日本語〉（平塚 涼） ・・・・・・・・62
- 〈やさしい日本語〉の新しい視点（藤野戸 柾希） ・・・・・・・・64
- 期末レポート（ボウ シゲン） ・・・・・・・・65
- 日本文化専門演習Ⅱ　期末レポート（渡邊 樹衣奈） ・・・・・・・・66
- このゼミで学んだこと（ジャン ジェウォン） ・・・・・・・・68

2022 年度のゼミ活動について

2022 年度はゼミとして、市立小樽美術館の企画展「美術館×やさしい日本語」に関わりました。公共性の高い施設である美術館の配慮を、ことばのユニバーサルデザインとも呼ばれる〈やさしい日本語〉を通して考える企画です。

ゼミ生は、キャプション（作品に付される解説文）のやさしい日本語への書き換えで参加しています。まず、〈やさしい日本語〉の成立の経緯、考え方、書き換えのコツやツールの使い方について学び合ったのち、市立小樽美術館の学芸員である山田菜月氏を外部講師として招き、ことばを使って相互の考えを共有する鑑賞の実践を行いました。1 学期末には、市立小樽美術館に赴いての作品鑑賞を行いました。

2 学期に入ってからは、2～3 名のグループに分かれて書き換えを行いました。それぞれのグループの進捗や成果物はコミュニケーション・アプリの Discord を用いてゼミ内や美術館と共有しながら作業を進めました。

今号には、市立小樽美術館の山田氏が作成したキャプションの原文と、ゼミ生が〈やさしい日本語〉に書き換えたものをまとめています。後半には、ゼミ生の振り返りレポートも掲載しています。

美術館×やさしい日本語

はじめに

この展覧会では、〈やさしい日本語〉で小樽美術館を楽しむことができます。

「やさしい」には、二つの意味があります。一つは「親切、美しい（優しい）」という意味です。もう一つは「簡単、わかりやすい（易しい）」という意味です。

「やさしい美術館」は、どんな美術館でしょうか？ あなたはどう思いますか？

この展覧会では、たくさんの絵を見ることができます。それはぜんぶ、小樽を描いた絵や、小樽に住んでいた人が描いた絵です。

あなたは、どんな絵が好きですか？ その絵には、どんなことばが合いますか？ 絵を見ながら、ことばを探してみてください。

やさしさとは

美術館にはたくさんの人がきます。小さな子供から、お年寄り、目の見えない人、車椅子に乗っている人、色々な人が集まる公共空間です。
美術館の展示室の中は、より多くの人が美術を楽しめるように考えられています。
例えば、壁にかけられる絵はみんながみやすい高さにかけられています。
ここでは、あえて少し「やさしくない」展示室を作ってみました。
少し高くなった絵や、少し読みづらくなった文字を見てみてください。
「やさしい」とは誰かのための特別仕様ではなく、あなたにも関係があることです。

美術館には、人がたくさん来ます。いろいろな人が集まります。小さなこども、としをとった人、目が見えない人、歩くことがむずかしい人……いろいろです。

美術館は、みんなが美術を楽しむことができるようにしています。例えば、下から 140 センチくらいの場所に絵をかざります。みんなが絵を見るときに、大変じゃないからです。

ここには、少し「やさしくない」部屋を作りました。

少し高い場所に絵を飾ってみました。少し読みにくい字で説明を書いてみました。

「やさしい」は、あなたにも関係があります。特別な人だけのものではありません。

なかむらぜんさく　かいこう　あき
中村善策《海港の秋》

本作は、小樽出身で日本を代表する風景画家となった中村善策が、生家から近く、「少年の頃から明け暮れ眺めて親しんだ」風景です。生き生きとした構図と鮮やかで明快な色遣いで遠くからみても善策の作品とすぐわかることから「善策張り」と呼ばれました。

小樽は風景画の題材に恵まれた町です。善策は、「山あり、丘あり、坂あり、平地あり、岬あり、海。その海の色だけでも我々は恵まれているのである」と語っています。「前景から中景へとくだり、そして遠景でぐっとせりあがっていく」構図は、豊かな自然と特徴的な地形、そして人々が紡いできた歴史を持つ小樽だからこそ生まれた構図であるといえます。

新進気鋭の風景画家だった善策は 1945 年の４月、43 歳のときに東京大空襲で作品のほとんどを失ってしまいました。その後、疎開先の信州で４年半にも及ぶ実直な自然観察を経て、1950 年代後半からは黄金期と呼ばれる時代を迎えます。自然を力ずくで自らの画風に落としこむのではなく、自らを自然に没入し、その空気さえもありのままに伝える画風は、今も尚多くの人に愛されています。

中村善策さんは、小樽で生まれました。子どものときはずっと小樽にいました。

善策さんは、この絵を 58歳のときに描きました。このとき、善策さんは東京にいました。1年に1回、小樽に帰りました。

この絵は、小樽の景色の絵です。善策さんは子どものとき、毎日、この景色を見ていました。善策さんはこの景色の絵を、たくさん描きました。

小樽には海も、山も、町もあります。海の色はきれいです。だから、小樽の景色の絵は、とてもいいです。

この絵を見てください。山の上から、遠いところを見ています。景色の中に、高いところも、低いところもあります。海も町もあります。町は古くて美しいです。

善策さんの絵はだいたい、色も形もにぎやかです。善策さんの絵をみたとき、「この絵は善策さんの絵だ」とわかります。だからこの色や形を「善策張り」と呼びます。

善策さんは、信州に 4年半いました。信州には山があります。善策さんは信州で自然をたくさんみました。だから善策さんは、自然の絵が上手です。善策さんの絵を見る時、私たちはその景色の山や、空がわかります。風もわかります。だからみんなは、善策さんの絵がとても好きです。

学生一人一人が、「海港の秋」の説明を〈やさしい日本語〉にしました。

何が違いますか。どこが似ていますか。くらべてみましょう。

中村善策はすばらしい画家でした。彼は東京の戦争でたくさんの絵をなくしました。彼が 43歳の時です。彼はそこから逃げました。逃げた場所で自然をたくさ

ん見ました。その後、みんなが彼の絵を褒めました。彼は自然をそのまま書きました。だからたくさんの人は彼の絵が好きです。

この絵は善策が「小さいときに見た景色」です。この絵は元気な色を使っています。だから彼の絵だとわかります。みんなは彼の絵を「善策張り」といいます。

小樽は景色を書くのに良い場所です。小樽には山や海があります。歴史もあります。彼は小樽の歴史と景色を知っています。だから彼は良い絵を書きます。

(足立 夏萌)

この絵は『中村善策』が描きました。この人はおたるで生まれました。この人は日本で有名な人です。この絵は中村善作が小さいときから住んでいる家の近くです。この絵はたくさんの色を上手に使っています。このことを《善策張り》といいます。

そしておたるには山や海があるので、絵が描きやすい町です。それを伝えるために、この絵は近い所は大きく描いています。そして、遠い所は小さく描いています。

中村善策が43才だったとき(1945年4月)に東京にたくさんばくだんが落ちてきて、この人の絵はほとんど焼けました。その後に東京から逃げて、森の近くに住

んだので、良い絵を描けるようになりました。自然からいろんなことを学んだからです。たくさんの人が中村善策の絵が好きです。

(小野 佑香)

1, 中村善策

中村善策は小樽で生まれました。彼は日本の有名な画家です。彼は 1945年の 4月に東京大空襲でたくさんの絵を無くしました。彼が 43歳の時でした。その後、信州で4年半も自然を見ていました。

2, 中村善策の絵

彼の絵は、元気が良く、はっきりとした色を使っています。遠くから見ても彼が描いた絵だと分かります。そのため、彼の絵を「善策張り」と呼びます。また、彼は自然をそのまま絵にします。だから、みんな彼の絵が大好きです。

3,《海港の秋》と小樽

この絵は、彼が小さいころに住んでいた家の近くです。彼が小さいころ見ていた景色を描きました。小樽は絵を描く材料(自然)がたくさんあります。善作は「小樽には山や海などがあります。海の色だけでも、私たちは運がよいです。」と言っています。小樽には、たくさんの自然があります。また、変わった形をしています。そして、たくさんの人が協力して歴史を作ってきました。だから、この絵が生まれました。

※東京大空襲・・・東京に爆弾が落とされた。→

(坂本 彩華)

この絵は　中村善策が　描きました。たくさんの　色で　描いています。

善策の絵は「善策張り」と　言います。彼は　おたるで　生まれました。

彼は　おたるを　たくさん　見ました。

善策は「おたるはたくさんのしぜん」があると　言いました。

おたるは　坂が多い　街です。たくさんの人が　住んでいます。

おたるを　絵に描くのは　すばらしいです。

善策は 43 才のとき、戦争で絵をなくしました。

その後、信州で　しぜんを　たくさん見ました。

善策が　55 才くらいのとき、すばらしい絵を　たくさん　描きました。

善策は　しぜんを　ぜんぶ　描きます。いらない　ものは 描きません。

善策の絵は、みんな　だいすきです。

(新谷 光静)

この絵は　小樽（おたる）で　生まれた人の　絵です。
中村善策（なかむらぜんさく）といいます。
善策は　1945 年　43 才のときに　戦争（せんそう）で　絵をたくさん　なくしました。
そのあと　長野県（ながのけん）で　長い間　自然（しぜん）を　よく見ました。
だから　自然を　そのまま　かきます。

この絵は　善策が　こどものときから　見ていた　景色です。
この絵は　元気で　明るい　色で　かいています。　これは「善策張り（ぜんさくばり）」といいます。
小樽は　景色の絵に　合った　町です。
善策は　小樽を　山、坂、海が　たくさんある　よい町と　言っています。

(南原（なんばら）　あこ)

この絵は 中村善策（なかむらぜんさく）がかきました。 善策（ぜんさく）は小樽（おたる）で生まれました。43 さいのとき、東京（とうきょう）にばくだんが落ちました善策（ぜんさく）の絵がたくさん燃えました。それからは、信州（しんしゅう）に逃（に）げました。信州（しんしゅう）で自然（しぜん）をみました。絵を学びました。善策（ぜんさく）の絵は、自分が自然（しぜん）をかくのではありません。自分は自然（しぜん）の中にいます。自然（しぜん）の空気も伝えます。だから、たくさんの人が好きです。

この絵は、善策（ぜんさく）がみた小樽（おたる）です。木（き）の葉（は）っぱ（っぱ）はひとつの色ではありません。みどり色があります。黄色があります。赤色があります。善策（ぜんさく）だとすぐわかる色です。「善策張り（ぜんさくば）り」といいます。
小樽（おたる）はかくものがたくさんあります。小樽（おたる）には山があります。海もあります。坂があります。まっすぐなところもあります。たくさんの人が大切にしてきたからです。この絵は小樽（おたる）だからかくことができました。

(八田（はった）　愛生（あおい))

中村善策(なかむらぜんさく)は、小樽(おたる)で生まれた絵を描く人です。
たくさんの有名な絵を描きました。

彼は４３歳のとき、空からの攻撃(こうげき)でほとんどの絵をなくしました。
そのあと、逃げた場所で４年半、自然を見ました。
自然との出会いが彼の絵を変えました。
彼の絵は、たくさんの人が好きです。

この絵は、彼が「小さい頃から毎日見ていた」場所の絵です。
元気な描き方ときれいな色の使い方です。
遠くからみても彼の絵だとわかります。
なので「善策張り(ぜんさくばり)」と呼びます。

小樽は、山、坂、海などがある町です。
善策は、「小樽の海の色だけでも十分だ」と言います。
そして、彼の絵の描き方は、小樽の自然・歴史から生まれました。

(平塚　涼)

この絵は、小樽で生まれた中村善策のものです。この絵は、善策が子供のときからよく見ていた風景です。絵全体を元気に、そしてきれいな色で描いています。遠くから見ても善策の作品だとすぐに分かると思います。小樽は風景きれいな街です。小樽はたくさんの自然といろいろな地形があります。

善策は43歳のとき、東京大空襲で作品のほとんどがなくなりました。それでも、善策は絵を描くことを続けました。

善策は自然をそのまま描きます。その描き方は、今もたくさんの人に人気です。

(藤野戸　柾希)

この絵は、小樽に生まれた中村善策が描きました。彼は小さいころから家の近くに、日が昇るのと落ちるのを見て、描きました。彼が描いた絵は明るい色とすてき

な感覚で有名になりました。人たちはこの描き方を「善策張り」と呼びます。

小樽は風景画のように美しい町です。小樽は、ゆたかな自然と特色がある地形で、また小樽の人たちが作った歴史を持っている町です。彼は、この町のすべてが私たちを恵んでいる、と言いました。近い景色が少し遠い景色より下にあります。そして、遠い景色が強く目の前に現れます。この構図は、小樽にしかないものです。この描き方は、1950 年代に流行っています。自然を絵の中に入れるのではなく、絵を自然に入れて、すべてのものがそのままに描かれる、という描き方です。この描き方が好きな人は、今でもたくさんいます。

残念なことですが、中村善策の作品は、1945 年 4 月の東京大空襲で、ほとんどなくなりました。

（ボウ シゲン）

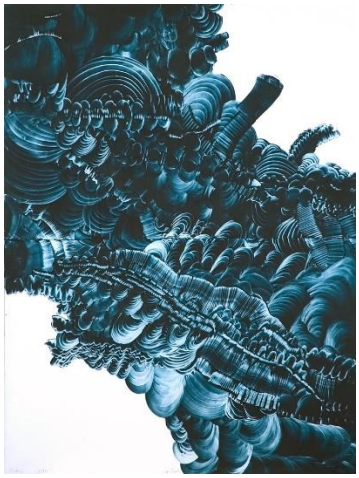
この絵は、中村善策が描きました。中村善策は小樽で生まれて育ちました。中村善策は 1945年4月、43歳のときに東京に落ちた爆弾で絵がなくなりました。そのあと、他の場所で草や花、山をたくさん見ました。1950年の最後の方は人気になりました。中村善策のきれいな絵は今もたくさんの人が好きです。

この絵は中村善策が「子どものときからずっと見た」ところです。この絵は中村善策の家から近いです。元気な明るい色で遠くから見ても中村善策の絵とわかります。だから、「善策張り」といいます。

小樽は景色の絵を描くことが簡単です。中村善策は「山や低い山、海がある。海の色だけでも私たちは良い。」と言いました。「前から後ろに高くなる」のは小樽なので生まれました。

(渡邊 樹衣奈)

いちはらありのり
一原有徳《TOK(es)》



淡い黒のインクのみで表現された世界。あなたは、この版画はどんな世界を描いていると感じますか。

作者は、「何にも見えないように」作品を作っていたと言います。タイトルも「何の単語にもならないように」つけられています。

作者の名前は、一原有徳。50 歳から版画を始めた一原ですが、この作品を作ったときは 82 歳でした。「人と同じことをしたくない」と考えていた一原は、誰も登ったことのない山を登る登山家でもありました。

この絵は、一原有徳さんがかきました。一原さんは 50歳のときから版画をつくっています。版画は木や石に形を描きます。そして、紙に押します。これが版画です。この版画は一原さんが 82歳のときにかきました。

一原さんは山に登ることも好きでした。ですが、一原さんは「ほかの人と同じことをしたくない」と考えていました。一原さんはほかの人が登った山に、登りません。

この絵は黒い色だけの世界です。あなたはこの黒い色だけの世界をどう思いますか？

一原さんがかく絵には意味がありません。この絵の名前にも意味がありません。

あなたはこの絵にどんな意味があると思いますか？

（小野 佑香、渡邊 樹衣奈）

いちはらありのり
一原有徳《SIY’92》

この版画は、「モノタイプ」と呼ばれる技法で作られています。
モノタイプの「モノ」はギリシャ語であるMONOS（モノス・ただ一つの）から由来したことばで、一度しか刷れない版画を意味します。
版画は、何度も刷ることできるのが特徴とされてきました。しかし一原が版画を始めた1950年代から、その後80年代にかけては、情報社会の発達や、印刷技術の発展により、芸術においてもオリジナルとコピーの関係が曖昧になり、「版画とは何か」を多くの人が考え直しました。
皆さんは、“版画”といえば何を思い浮かべますか。
彫刻刀で木を彫り、版を作ること。ローラーで版にインクを塗ること。バレンで紙をこすること。紙を剥がすと画面が反転していること。版画は、色々な工程を経て作品を作りますが、一原は、ネガ(版)とポジ(版画)の関係性こそ版画であると考え、鏡に写った世界や、下駄の焼印なども「版画である」と考えていました。
版画という限られた表現手段の中で新しいイメージを生み出し続けた一原は、「版画の鬼才」と呼ばれました。

版画は何回も同じものを作ることができます。

しかし、この版画は「モノタイプ」です。

「モノタイプ」は、1回で1つだけ作る版画です。

一原さんは 1950年代に、版画を始めました。1950年代から 1980年代は、絵や字をコピーする技術が進みました。だから、最初に作ったものとそのコピーのちがいがはっきりしませんでした。このとき、たくさんの人が「版画とはなにか」を考えました。

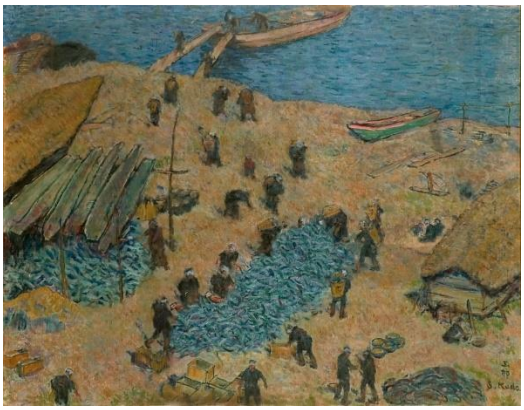
一原さんは、版画とは「ネガ（版）とポジ（版画）があること」と考えました。たとえば、鏡にうつった世界も版画です。

版画とコピーはちがいがはっきりしません。しかし、一原さんの版画は「モノタイプ」です。一原さんだけの版画をつくりました。だから、人は一原さんを「版画の鬼才※1」と呼びます。

1 鬼才…人とは思えないくらい、1つのことを上手にできる人

（南原 あこ、八田 愛生、平塚 涼）

工藤三郎《海の幸》



穏やかな浜辺が、たくさんの人で生き生きと賑わっています。せわしなく岸辺と浜を行き来する人や、座り込んで作業をする人。性別や年齢も様々で、子供たちも集まっています。

小樽市民の多くが一目でこの絵を「ニシン漁」の絵であるとわかるでしょう。モッコと呼ばれるニシンを運搬する籠を背負った人たちによって、青く光る魚が浜に積み上げられています。漁期になると「暇なのはお巡りさんとお坊さんと」言われたほどで、大群が押し寄せれば学校も休みになったと言います。

この絵を描いた工藤三郎は、資本家の家に生まれましたが、身近な労働者や民衆の生活を生き生きと描写した作品を多く残しました。

当時、洋画家たちはマティスやピカソなどの新しい造形理論に興味津々で、工藤も渡欧中には流行の画風を模索し、奇抜な造形や着彩を試みたこともありました。帰国後は東京で活躍したいと願っていましたが、家業の事情でやむなく帰郷。しかし画家としての実績に縛られなくなったことを機に、明るく爽やかな小樽の風景や家族の肖像などを、工藤らしい青を基調とした写実で描きました。確かな実力と朗らかな人柄で絵を描くことの楽しさを伝え、多くの後輩画家たちに慕われた画家です。

たくさんの人が、海の近くにいます。きっと、ここはとてもにぎやかです。

忙しく歩いている人もいます。座って仕事をしている人もいます。

女の人も男の人もいます。子どももいます。いろいろな人がいます。

ニシンは、魚の名前です。寒い海に住んでいます。

大人たちが、大きなかご[basket]を持っています。このかごを、「モッコ」と言います。

みんながニシンを運んで、一つのところに置いています。青い魚の山ができています。

小樽は、ニシンで有名です。だから、小樽の人はきっと、「これはニシンの絵だ」とわかります。

昔の小樽では、ニシンの季節は、みんなとても忙しかったです。

ニシンをたくさんとったときは、学校も休みになりました。子どもも仕事を手伝ったからです。

工藤三郎が、この絵をかきました。工藤は、お金持ちの家の子どもでした。でも、工藤の絵の中の人は、お金持ちではありませんでした。働いている人や、ふつうの人をたくさんかきました。

そのころ、洋画をかく人たちは、新しい絵にとても興味がありました。たとえば、マティス[Henri Matisse]やピカソ[Pablo Picasso]などです。

工藤も、ヨーロッパに行きました。そして、新しい形や色で、絵をかいてみました。

「日本に帰ったあと、東京で絵をかきたい。そして有名になりたい」と考えました。

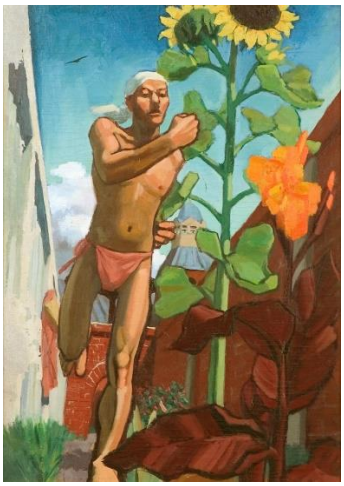
しかし、小樽に帰らなければなりませんでした。家族の仕事を手伝わなければならなかったからです。

小樽に帰って、工藤は自由になりました。「有名になりたい」と思わなくてもよかったからです。

そして、小樽の明るい景色や、家族の絵をかきました。工藤は、青い色をたくさん使って、見たとおりにかきます。

工藤は絵が上手でした。そして、明るい人でした。若い人たちは、工藤がとても好きでした。工藤が「絵をかくことは楽しい」と教えたからです。

大月源二《走る男》



青空の下、大きなひまわりとカンナの咲くそばをフンドシ姿の男が駆け抜けています。青年は前を見据え、力強く腕を振り上げていますが、周りは高い塀に囲まれています。

この絵は、自画像だと言われています。作者の大月源二は、庁立小樽中学(現小樽潮陵高校)を卒業後、東京美術学校(現東京藝術大学)に進学し、さまざまな思想・哲学に触れた後、社会主義・共産主義運動の中から生まれたプロレタリア文芸連盟美術部に加盟しました。

1932 年、28 歳のときに大月は治安維持法で検挙、投獄されます。同郷で、『蟹工船』など作品の挿絵を多く手がけてきた小林多喜二の死は、拘留されていた独房の中で知りました。

大月は獄中で画風の転換を余儀なくされますが、1935 年仮釈放となり出獄。この作品は、出獄した翌年に描かれています。

「カラッとした明るさ」があります。青年は、どこに向かって走っているのでしょうか。

あおいそらのした、おおきなひまわり※1とカンナ※2がさいています。そのそばをおとこのひとがはしっています。かれはまえをみて、おおきくうでをあげています。まわりにはたかいかべがあります。

おおつきげんじさんがこのえをかきました。かれはおたるのちゅうがっこうをそつぎょうしたあと、えのだいがくに入りました。そして、プロレタリアぶんげいれんめいびじゅつぶにはいりました。それは、ソーシャリズム[Socialism]・コミュニズム[Communism] うんどうのなかからうまれました。

おおつきさんは、こばやしたきじさんのほんのえをたくさんかきました。たきじさんは、「かにこうせん」などのしょうせつをかいたひとです。おおつきさんとたきじさんは、かんがえかたがにていました。

1932 ねん、28 さいのときに、おおつきさんはほうりつをまもりませんでした。なので、けいさつがかれをつかまえました。つぎのとしに、けいさつはたきじさんもつかまえました。たきじさんはそのまましんでしまいました。

1935 ねん、おおつきさんはしゃかいにもどりました。そして、1936 ねんにこのえをかきました。

おとこのひとは、どこかにむかってはしっています。どこにむかっているとおもいますか？

1　ひまわり…なつにのびて、しゅういがきいろで、ちゅうおうがちゃいろのはな

2　カンナ…みなみのくにでさく、きいろやあかのはな

（新谷（しんや）　光静（こうせい）、ジャン　ジェウォン）

筆谷等観《星籟》

タイトルに星という字が入っていますが、作品に星が描かれているようには見えません。籟(らい)という字は〈ひびき〉や〈こえ〉という意味で、山籟(山をわたる風の音)、神籟(優れた詩歌や音楽の例え)などのように使われてきました。

人間は古来より星を観察し、星の位置や動きから自分の進むべき方向や、今後の運勢を見出してきました。
画面の下では、漢服を着た位の高そうな人が頭を空に向かって祈りを捧げています。
星籟というタイトルは作者の造語ですが、星からのお告げのような意味でしょうか。
作者の筆谷等観は小樽出身の日本画家です。東京美術学校(現・東京藝術大学)を卒業し、小樽で最も早く活躍した画家の一人となりました。

人はむかしから星をよくみました。未来を知りたいから、星をみました。

男の人が、むかしの中国の白い服を着ています。そして、空の星に向かって祈っています。

「星籟」とはどのような意味でしょうか。この絵をかいた人がこのことばをつくりました。

「籟」という漢字の意味は、〈おと〉や〈こえ〉です。

この絵は筆谷等観さんがかきました。等観さんは小樽で最初に画家になった人です。等観さんは小樽で生まれました。そして、東京美術学校（今の東京藝術大学）をそつぎょうしました。

（南原 あこ、八田 愛生、平塚 涼）

やまだよしお　おくて
山田義夫《晩稲》

大きな稲束を抱える二人の女性。空は薄暗く、農作業が日が陰るまで及んでいることがわかります。

農耕生活を美化することも、讃えることもなく克明に描いた作品は、ときに「体臭が強い」という言葉で評されました。

山田は倶知安に生まれ、小樽、江別、札幌で美術教師をしながら制作を続けた画家です。幼少期から身体が弱かった山田は、北海道の厳しい風土と、そこに生活する人々の姿をたくさん描きました。信念が強く、デッサンを大切にし、確かな実力と審査員に媚びることなく公募展で入賞を遂げた実績で、画家仲間たちから尊敬を集めました。

タイトルの「晩稲」とは、稲の収穫時期の差による名称で、他の品種よりも成熟が遅いことから、世間一般よりも恋愛に対し消極的な人のことを指す「奥手」の語源にもなった言葉です。

二人の女の人が稲※1を持っています。空は暗い色です。二人は夕方まで仕事をしていました。食べ物を育てていたのです。

この絵を描いたのは、山田義夫さんです。山田さんは北海道の倶知安で生まれました。

そして、小樽、江別、札幌の学校で絵を教えました。

彼は北海道の絵をたくさん描きました。そして、そこに住んでいる人を描きました。

この絵は「食べ物を育てること」を描いています。

山田さんはものをみたとおりに描きました。美しく描きませんでした。この絵から「体の臭いがする」という人もいました。

絵の名前は「晩稲」です。晩稲は〈おくて〉と読みます。晩稲は、長い時間をかけて大きくなります。

そこから「奥手」ということばができました。「奥手」は、恋をするのが遅い人の意味もあります。

1 稲…お米になる植物（plant）。

（足立 夏萌、坂本 彩華）

小松 清 《宵》

黒い空間に突然現れた扇型。扇型を横断するように広がる曲線は、川の流れのようにも、時空の裂け目のようにも見えます。

タイトルの「穹」という漢字は、弓形やドーム形を意味する漢字です。空をドーム型の天井に見立て、大空を表すときにも使われます。

小樽は、絵になる風景が多い地域性も相まって、具象的な風景画家を多く輩出してきました。小樽に生まれ、中学・高校在学中から実力を高く評価された小松は、小樽で抽象画に挑戦した最初の画家の一人です。

1950 年代は、戦後の傷のまだ癒えぬ中、復興への希望を抱え、画家たちは新しい表現を模索した時代でした。外国から流入したアンフォルメルやアクションペインティングなど、激しく衝動的な表現が流行し、多くの若い芸術家が前衛芸術に挑戦しました。

小松にとって抽象表現は、「どのように表現するか」が主題となるものではなく、あくまでも自分の内面を表現する手法の一つでした。

くろいばしょに おうぎがたが あります。

おうぎがたの うえに まがったせんが あります。そこには かわが あるようにもみえます。

じかんを わけているようにも みえます。

このえの なまえには「穹(きゅう)」というかんじが あります。

「穹(きゅう)」というかんじの いみは〈ドームのようなかたち〉です。

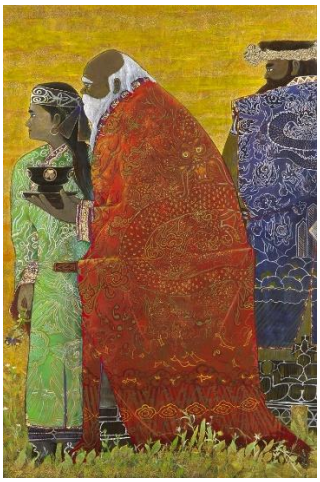
ひろいそらが あるときにも つかいます。

このえは こまつ きよしさんが かきました。

こまつさんは おたるで うまれました。こまつさんは せんや てんを つかって じぶんのことを かきます。このように せんや てんを つかってかくえを 「ちゅうしょうが」といいます。こまつさんは 「ちゅうしょうが」を おたるで さいしょに がんばって かいたひとです。

（小野（おの） 佑香（ゆうか）、渡邊（わたなべ） 樹衣奈（きいな））

本間聖丈（ほんませいじょう） 《蝦夷錦（えぞにしき）》



漆塗りの器を両手で大切そうに運んでいる男性を中心に、登場人物が揃って同じ方向を見つめています。その様子はなんとも厳粛で、何かの儀式の最中のようです。

男女が纏う華麗な文様が施された衣装。精細に描かれた文様をよく見てみると、男性の衣装には中国で皇帝を意味する龍が、女性の衣装には中国で縁起の良い花とされる牡丹が描かれています。タイトルの蝦夷錦とは、中国の官服で、アムール川下流域からサハリンを経て、北海道に入ってきたとされています。蝦夷が原産ではないのに、蝦夷錦と呼ばれるのは、松前藩がアイヌを仲介して錦の交易を行なっていたためです。

作者の本間聖丈は日本画の顔料について、「装飾的画法に適している」と考えていました。金糸と銀糸で史実に基づいた装飾が施された蝦夷錦からは、知識欲旺盛だった作者の人柄と、装飾的な美と日本画の美を調和させようとした作者の拘りが見て取れます。

この絵にはアイヌの人が 3人います。男の人が、きをつけて皿を運んでいます。絵の中の人たちはみんな同じ場所を見ています。彼らはきっととくべつなことをしています。みんなとてもまじめな顔です。

彼らのふくにはきれいな絵があります。とても細かい絵です。よく見てみましょう。

男の人のふくにりゅう[dragon]の絵があります。りゅうは中国で王をあらわしています。

女の人のふくには牡丹という花があります。牡丹は中国でとても良いいみを持っています。

タイトルは「蝦夷錦」です。

「蝦夷錦」は中国のとくべつなふくです。

「蝦夷」は昔の北海道の名前です。これは、蝦夷でつくったものではないです。北海道から日本に入ったから、蝦夷錦と呼びます。

この絵をかいた人は本間聖丈です。

この絵を見て、2つのことがわかります。

1つは、蝦夷錦の美しさと日本画※1の美しさです。

もう1つは、本間は、いろんなことを勉強する人でした。

1　日本画：日本に昔からあるとくべつな絵のかき方

美術館とやさしい日本語

美術館は、絵画や彫刻といった視覚芸術を扱う場所だからこそ、視覚的イメージから受ける印象や、感じたことを表現する新しい言葉と出会う場所です。
しかし、美術館を取り巻く言葉は、得てしてやさしくないときがあるかもしれません。
細かなニュアンスを伝えるための専門用語を見直して、シンプルで身近なことばを作品に添えてみると、どんな発見があるでしょうか。

美術館には、絵や彫刻などがたくさんあります。私たちは、目で見て楽しむことができます。そして、たくさんのことを考えます。たくさんのことを見つけます。

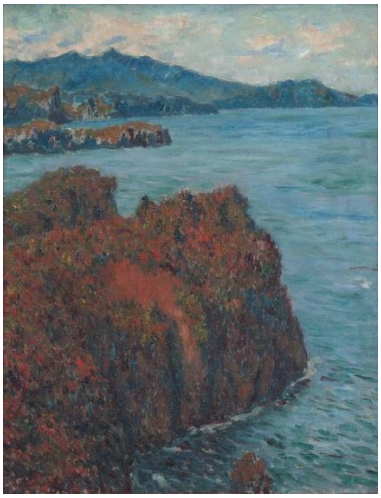
そして、みんなは、見つけたことを話します。考えたことを言葉で書きます。だから、美術館では新しい言葉と会うことができます。

でも、美術館にある言葉はときどき、やさしくないです。細かく説明するので、難しい言葉もあります。

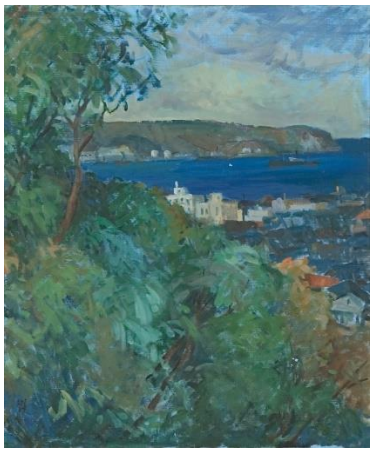
ここでは、難しい言葉をやめて、かんたんな言葉を使いました。

あなたはここから、何を考えますか？ 何を見つけることができますか？

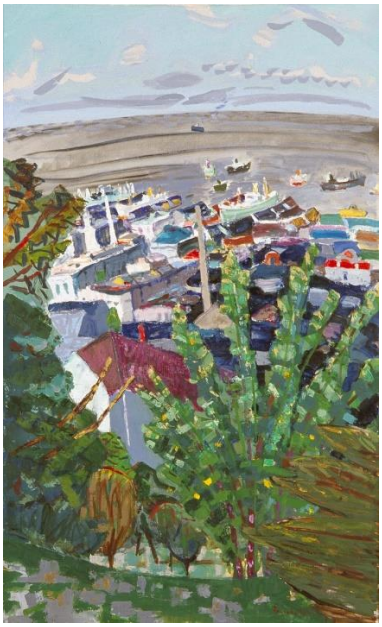
おたるは
小樽派



工藤三郎《秋晴》



三浦鮮治《小樽港展望》



中村善策《小樽港展望》

北海道の美術史の中に「小樽派」という言葉があります。画家の工藤三郎が亡くなった1932年頃、小樽の画家たちを総称して「小樽派」という言葉が生まれました。

当時、道内作家の作品を地域毎に展示すると、小樽の画家たちの作品は「一見明らか」だったといいます。当時の人々は、小樽派の作品の特徴を「起伏多き港町の画人の特異性」や「郷土を愛する気持ちからある共通する視点」であると表現しました。

小樽では、フランス留学から帰郷した工藤三郎から直接教えを受けた三浦鮮治が、小樽洋画研究所を開きました。そこには画家志望の若者が集まり、中村善策らを排出しました。日本を代表する風景画家になった中村は、上京後も定期的に帰樽して小樽の後進たちを指導し、彼らの中には小樽で美術制作を続ける者や、美術教師になる者もいました。

こうして、今日の小樽にも脈々と「小樽派」の系譜が続いています。

北海道の美術の歴史には、「小樽派」ということばがあります。

工藤三郎さんは「秋晴れ」をかきました。そして、1932年になくなりました。

そのあと、小樽で絵をかく人たちを、「小樽派」と呼びます。

「小樽派」の絵は北海道のほかの絵より「とくべつ」です。どうしてでしょうか。

それは、小樽には山も海もあるからです。そして「小樽派」の人たちは、小樽のことが好きだからです。

工藤さんはフランスで絵の勉強をしました。小樽に帰ってから、三浦鮮治さんに絵のかき方を教えました。

三浦さんは自分の家で「小樽洋画研究所」を開きました。「小樽洋画研究所」では、絵の練習ができます。誰でも使うことができます。

そこにはたくさんの若い人が来ました。

その中には、日本で有名な中村善策さんもいました。

善策さんは景色をかく人です。彼は東京に住みましたが、ときどき小樽にもどりました。そして、小樽で絵のかき方をたくさんの人に教えました。

その中に、小樽で絵をかくことを続ける人がいました。美術の先生になる人もいました。

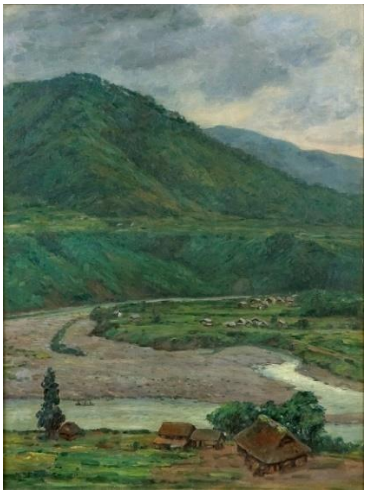
こうして、「小樽派」は今の小樽にも続いています。

（新谷　光静、ジャン　ジェウォン）

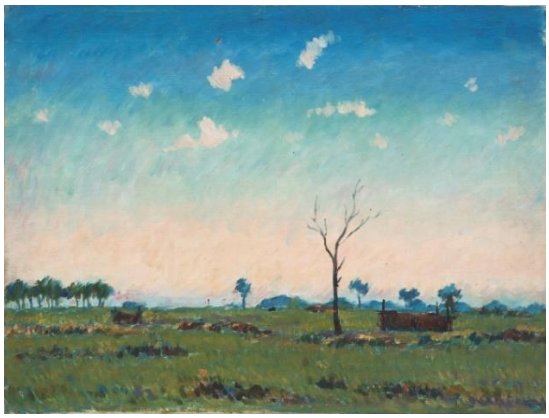
ほっかいどうようがはっしょう　　ち
北海道洋画発祥の地

わだえいさく
和田英作《田舎の夕暮れ》

はせがわのぼる
長谷川昇《富士山》



こでらけんきち
小寺健吉《曇りの山》



くどうさぶろう
工藤三郎《風景》

今から 100 年前、小樽の街や港は、北海道の農産物を世界へと輸出する集積と積み出しでたいへん活気付きました。世界市場との距離感が急激に縮むと、外国文化の影響も受けやすくなります。美しい街の景観も相まって、小樽では美術も文学も早くから広く愛され、豊かで独自な展開をみせました。

長谷川昇、小寺健吉、工藤三郎は共に小樽の裕福な家に育ち、一学年ちがいで東京美術学校(現在の東京藝術大学)に進学しました。当時日本では相次いで帰国した和田英作ら留学作家によって欧米の絵画が紹介され、自然光の色彩を表現するため戸外で制作する「外光派」の画風が主役でした。外光派は、すずやかで明るい光をまとい、影の部分を青や紫で描くことから日本では「紫派」とも呼ばれました。当時の画家は「どのように描くか」が命題でしたが、長谷川、小寺、工藤も、学生時代は少なからず外光派な絵画の影響を受けていたようです。やがてそれぞれ渡欧を経て、それぞれの画風を見つけ出します。

3 人は長期休みで帰郷した際、小樽初の洋画展「羊蹄画会」を開きます。この展覧会は、一説では北海道で初の洋画展とも言われており、このことから小樽は「北海道洋画発祥の地」と呼ばれます。

100年前、小樽はとても元気なところでした。小樽は北海道の食べ物がたくさん集まりました。そして、外国の文化が小樽にたくさん入りました。

小樽には、美しい景色があります。たくさんの美術や文学もあります。みんな、小樽の景色や美術がとても好きでした。

長谷川 昇さん、小寺 健吉さん、工藤 三郎さんは、小樽のお金持ちの家で産まれました。3人は、絵の大学に入りました。

そのころ、外国から日本に小説家が帰ってきました。その小説家が、外国の絵を紹介しました。そのとき、みんな「外光派」の絵が好きになりました。「外光派」では、自然な光を描くために、外で絵を描きます。影のところを青や紫[purple]で描くので、日本では「紫派」と呼びました。

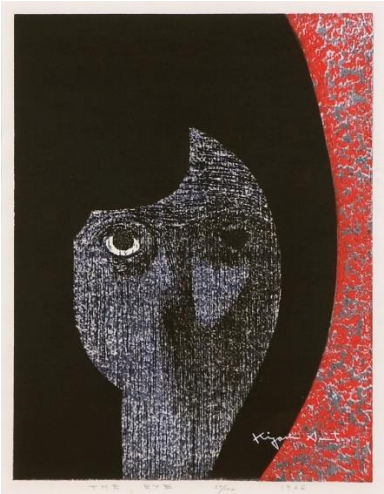
長谷川さん、小寺さん、工藤さんも、学生のころ、外光派の絵の影響を受けました。3人は「本物のように描く」よりも「どうやって描くか」を探していました。そして、ヨーロッパに行って、絵の描き方を見つけ出しました。

3人は、長い休みのときに小樽に帰りました。そして、「羊蹄画会」を開きました。「羊蹄画会」は、北海道ではじめての洋画展だと、みんな考えています。だから小樽は「北海道洋画発祥の地」と呼ばれます。

（藤野戸　柾希、ボウ　シゲン）

小樽と創作版画

成田玉泉《能 猩々》



斉藤清《THE EYE》

棟方志功《鷹持妃の柵》

木版画は、飛鳥・奈良時代に印刷技術として日本に伝来し、浮世絵などを複製するときに使われてきた技法で、従来は原画から版を経て刷り取られた伝達目的のメディアにすぎないとされてきました。明治末から広まった創作版画運動では、版画のすべての制作工程を版画家自身が行うことで、工業製品であった木版画をクリエイティブなオリジナル作品だと主張しました。

北海道で版画に対する関心がまだ薄かったころ、その後日本の版画界の巨匠となる二人の版画家が小樽で出会っていました。棟方志功と斎藤清――その出会いには一人の美術教師・成田玉泉(なりた・ぎょくせん)が関わっていました。 3

成田は、同郷の版画家・棟方志功を小樽に呼び、教え子や、勤務校の生徒たちと交流させました。このとき、小樽駅で成田と共に棟方を出迎えたのが、当時成田の元でデッサンを学びながら看板店を営んでいた斎藤清でした。成田は、棟方が帰ってからも版画の画材の選び方から下絵の書き方まで熱心に指導し、勤務校の生徒だった河野薫や金子誠治も木版の道に進みました。 棟方と斎藤は、上京後に二人展を開催し、成田を通じて出会った縁から交流を重ねています。斎藤は成田を「生涯ただ一人の師」と仰ぎ、その後日本を代表する版画家として国際的な人気を得ました。

木版画※1は1300年ぐらい前に日本にきました。はじめは、有名な絵をたくさんつくるために使いました。

創作版画では、版画を作るとき、最初から最後まで、ぜんぶ1人で作ります、だから版画はコピー※2ではなくなりました。それは美術の作品になりました。

昔、北海道では、版画を好きな人が少なかったです。そのとき二人の創作版画を作る人が小樽で出会いました。棟方志功と斎藤清です。

成田玉泉が棟方を小樽に呼びました。成田は小樽の学校で美術の先生をしていました。斎藤は小樽で看板屋をしていました。斎藤は成田に絵を教わっていました。

その後、棟方と斎藤はそれぞれ東京に行きました。そこで、二人は友達になりました。そのあと、二人は日本中で有名になりました。彼らの版画を見て、外国の人たちも日本の版画を好きになりました。

成田は学校の生徒たちにも、創作版画の作り方を教えました。河野 薫と金子誠治は成田の学校の生徒でした。彼らは、小樽でたくさんの版画を作りました

1 木版画…木を使った版画

2 コピー…同じものを沢山作ること

（足立 夏萌、坂本 彩華）

みる、ことばにする

ここからは、異なる画家が、同じテーマで描いた作品を、一緒にみていきます。
あなたはどの作品が好きですか？
感じたことや、思い出したことをことばにしてみましょう。その作品にはどんなことばが合いますか。
人によって、作品の見え方はちがいます。ことばの扱い方もちがいます。
一緒にきた人や、この展示をみた他の人と比べてみてください。

ここには、小樽運河の絵と、娘を描いた絵があります。

（運河は、物を運ぶために作った川です。）

同じものを描いた絵です。でも、描いた人が違います。

あなたは、どの絵が好きですか？

この絵を見て、どう思いますか？ 何か思い出しましたか？ 話したり、書いたりしてみましょう。

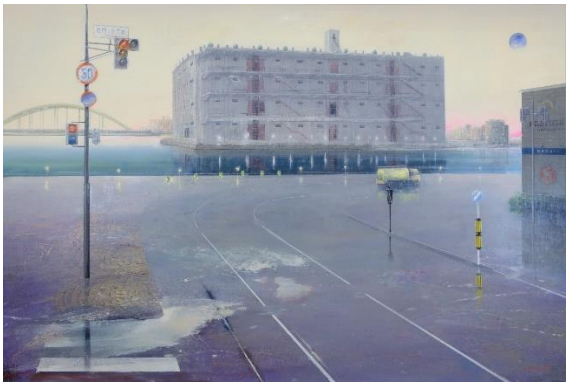
その絵には、どんなことばが合いますか？

あなたは今日、友達や家族と一緒にここに来ましたか？

もし誰かと一緒だったら、話してみましょう。

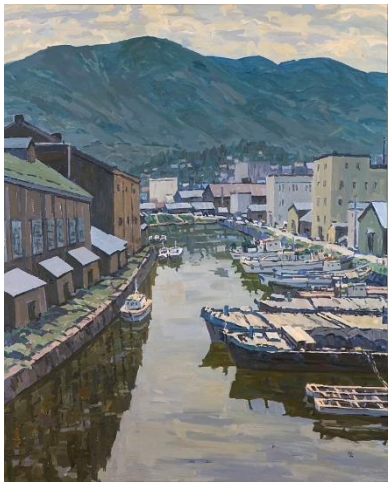
友達や家族は、何と言いましたか？ くらべてみましょう。

小樽運河について



羽山雅愉《青い月》

木嶋良治《冬の日》



石塚常男《運河》

小樽運河を描いた作品はたくさんあります。小樽運河といえば、観光都市小樽の象徴としてのイメージが強いですが、なぜこれほどに画家たちに描かれてきたのでしょうか。

1923 年、今から約 100 年前に完成した小樽運河は、北海道の玄関口として、大きな役目を果たしていました。時代と共に役目を終えると、道路として全て埋め立てる計画が立ち上がります。

一部が埋め立てられ、遊歩道が整備された現在の運河の姿は、運河を未来に残そうとした「運河保存運動」の決着点でもあります。

小樽市民にとって運河は、中心部に位置する見慣れた風景であり、あの頃の小樽を思い起こさせるものでもあります。倉庫群と煌めくガス灯は、姿を変えながら、商業都市から観光都市へと紡いだ小樽の物語の象徴です。

一言では語り尽くせないストーリーを抱きながら、運河は今日も美しく佇んでいます。画家たちはそれぞれのストーリーを絵筆に乗せて、いつの時代も運河を描いてきました。同じ運河を描いていても作品はただ一つとして同じものはなく、描く角度も、時間帯も、目の付け所も様々です。

小樽運河をかいた絵はたくさんあります。なぜ、絵をかく人は小樽運河が好きなのでしょうか？

1923 年に小樽運河は完成しました。しかし、小樽運河は古くなったので、使われなくなりました。

なので、運河を壊して道にしたい人たちがいました。

小樽運河を大切にするために「運河保存運動」が始まりました。

小樽運河は半分の幅になりました。もう半分は道路になりました。そして、外灯や、散歩する道が作られました。

それから、小樽は大きく変わっていきました。観光で有名な町に変わりました。

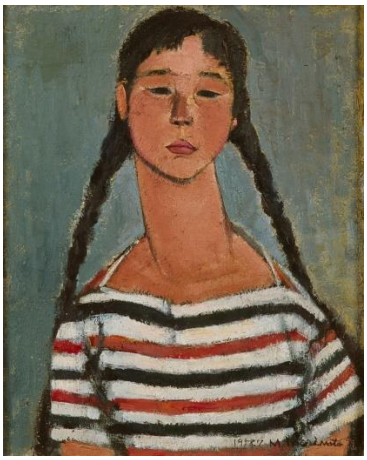
だから、小樽に住んでいる人たちは小樽運河がとても大切です。

絵をかく人は同じ運河をかきます。しかし、みんないろいろなかき方で運河をかきます。

運河は今日もきれいです。

（小野 佑香、渡邊 樹衣奈）

娘を描いた作品について



森本光子《少女》

武石英孝《冬の日》

田中針水《姉妹》

ここでは画家が、自分の娘を描いた作品を並べています。画家と娘という間柄からは、想像を広げる手がかりが少なくありません。

三人の画家は、それぞれ異なった描き方で娘を描いているように、娘に対する思いも三者三様であったことでしょう。

画家にとって家族とは、日々の幸せや悲しみを分かち合ってきた１番身近なモデルです。娘を描いた作品には、日常生活を共にした家族への複雑で、温かい心情が表れています。

ここには、3枚の女の子の絵があります。みんな、絵をかいた人のむすめです。

3枚の絵は全部、かいた人がちがいます。絵をかく人は家族の絵がかきやすいです。なぜなら、一緒にいる時間がとても長いからです。

3人は、いろいろなかきかたでむすめをかきます。それがむすめへの気持ちです。

むすめをかいた絵には、家族への気持ちがたくさん入っています。

（小野 佑香、渡邊 樹衣奈）

ちがいを知(し)る

　美術館は、多様な人が関わりながら成長していきます。
　どんな展示がみやすい展示なのか、美術館は探ってみたいと思います。作品の高さや、文字の大きさ、文章の長さ。私にとっては見やすくても、あなたにとっては見えにくいかもしれません。
　“ちがい”を言葉にすることは“色んな普通”があるということを知ることです。

どうしたら、もっと絵(え)が見(み)やすいでしょうか。

美術館(びじゅつかん)は、「それを探(さが)したい」と思っています。

絵(え)を高(たか)いところに飾(かざ)ったほうがいいですか。低(ひく)いほうがいいですか。

字(じ)は大(おお)きいほうがいいですか。小(ちい)さいほうがいいですか。

文章(ぶんしょう)は長(なが)いほうがいいですか。短(みじか)いほうがいいですか。

私(わたし)は、「この字(じ)は見(み)やすい」と思(おも)います。

でも、あなたはどう思いますか。私とあなたはちがいます。

だから、あなたは「この字(じ)はとても小(ちい)さい」と思(おも)うかもしれません。

「この文章(ぶんしょう)はとても長(なが)い。だからわからない」と思(おも)うかもしれません。

私たちは、みんなちがいます。

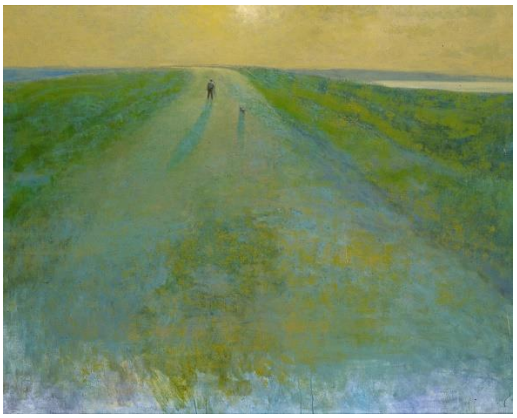
だから、「ふつう」もたくさんあります。「いろいろなふつう」があります。

私たちの「ちがい」を考えてみましょう。話してみましょう。

美術館にはいろいろな人が来ます。

いろいろな人が、美術館をもっといい場所にします。

どの文字が読みやすいですか。



宮川魏《道》

広い野原に通った一本の道。遠く遠く先に、一人の人間と、一匹の動物の姿が見えます。
彼らはどこにいくのでしょうか。長く伸びた影。足取りはあまり軽そうには見えません。
この絵は、画家の宮川魏の最晩年の作品です。
宮川は小樽に生まれ、東京美術学校(現在の東京藝術大学)の油絵本科に入学しましたが、在学中に大病を患い帰郷。一時は絵を書くこともままなりませんでしたが、小樽で若者たちにデッサンや油絵を指導しながら、画業を続けました。宮川は、「もしもまた、生まれ変わる事が出来るなら、今後は健康な体でもう一度絵描きになりたい」と語っていたといいます。
宮川の描く風景は、明確な場所を描いたわけではなく、心の中の風景だと言われています。

一本の道が、広いところを通っています。そこにひとりの人と、1ぴきの動物が見えます。彼らはどこに行くのでしょうか。

長いかげ [shadow]が見えます。彼らは歩きたくないのかもしれません。

宮川魏さんは、56歳の時に亡くなりました。亡くなる前にこの絵をかきました。

宮川さんは小樽で生まれました。そして東京美術学校(今の東京藝術大学)に入学しました。

しかし、学校にいるとき、大きな病気になりました。だから、絵をかくことがむずかしくなりました。

しかし、小樽で若い人に絵を教えて、絵をかく仕事をつづけました。宮川さんはいいました。「また生まれたら、もう一度元気に絵をかく仕事がしたいです。」

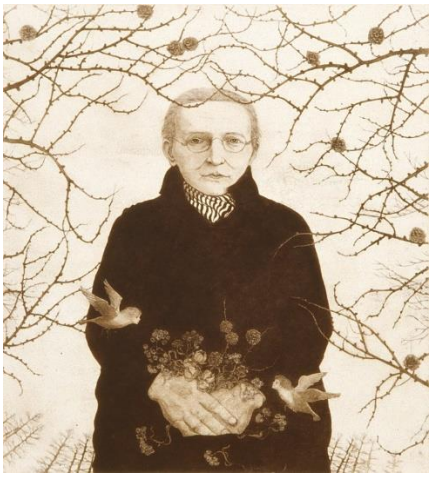
ここは、本当にある場所ではありません。

この絵の場所は、宮川さんの心の中にあります。

（南原 あこ、八田 愛生、平塚 涼）

どの高さがみやすいですか。

森ヒロコ《なわとび》



森ヒロコ《冬の華》

森ヒロコ《燐寸》

作品はどれも小樽出身の森ヒロコによる作品です。
鉛筆やペンで直接紙に描かれたものではなく、銅版から紙に写し取られた版画です。
銅と薬品の化学反応を用い、色の濃淡や、繊細な表現を可能にしています。
森ヒロコの作品には、天使や、少年少女といったメルヘンチックなモチーフが描かれていますが、そこには甘い雰囲気ありません。登場人物の憂を帯びた眼差しを見つめると、私たちもたちまちその世界に引き込まれてしまうようです。

森ヒロコさんは小樽に生まれました。

森ヒロコさんはこの3つの絵をかきました。

彼女はよく少年少女などのかわいいものをかきます。

しかし、これらの絵はかわいいだけではありません。

彼らの目を見てみましょう。

その目には、いろいろな気持ちが見えます。

この3つの絵は、銅版画です。

銅版画は銅の板から紙に写した絵です。

この絵は、薬をつけたペンで銅を削っています。

また、銅に薬をつけて、絵の色の濃いところと薄いところを変えています。

（藤野戸　柾希、ボウ　シゲン）

振り返りレポート

やさしい日本語の可能性

足立夏萌

1年間のゼミ活動では主に「やさしい日本語」について学んできた。前期では、書き言葉・音声・文法など、様々な視点から見た「やさしい日本語」について、日本語学習者・障がい者といった様々な対象にとっての「やさしい日本語」について学んだ。「やさしい日本語」について学び始めた頃は、「文章をすべて平仮名にする」、「主語を繰り返し文章に入れる」、「話すときはゆっくりと話す」などを意識すれば、皆にとって理解しやすい「やさしい日本語」へと変換できると考えていた。しかし、「やさしい日本語」はそう単純なものではなく、「やさしい日本語」を書くのか、話すのか、誰に対して使うのか、どこで使うのかといった様々な状況や立場を考慮して考える必要がある。特に、日本語学習者に対する「やさしい日本語」は個人の学習状況や出身地が異なることで、人によって「やさしい日本語」だと感じるか否かが異なるため難しい。例えば、日本語能力試験N4レベルの中国人は、ある程度日本語についての知識があり、日常的に漢字を用いることが特徴とされる。そのため、母語を日本語とする日本人が理解しやすいと感じる日本語のレベルで文章を構成し、漢字を取り入れた文章を作成することで、彼らにとって「やさしい日本語」だと感じやすい日本語が完成する。相手の置かれている状況や相手が備えている日本語能力を踏まえ、「この状況で」「この人にとって」、「やさしい日本語」とは何かを考える、相手の立場に立つことの重要性を感じることが出来た。

さらに、「やさしい日本語」は日本語学習者である外国人にとって有効な日本語であるというイメージが強かったが、ゼミ活動を通し、日本人にとっても非常に有用性があり、将来性のあることばであると感じた。

「やさしい日本語」は防災の観点で重要視されている。外国人をはじめ、子どもや高齢者、障がい者に対しても「やさしい日本語」は有効なツールの1つである。災害が起こった際、テレビやラジオ等から情報を得ることは非常に重要である。また、その情報には簡潔さと分かりやすさが求められる。このような状況で、視覚情報・聴覚情報において「やさしい日本語」を活用することで、正確な情報の把握、災害時の迅速な避難に繋がると考えられる。また、「やさしい日本語」と身振り手振りとを組み合わせることで、より多くの人に分かりやすさを提供

することが出来る。以上のように、日本人を対象とした際にも「やさしい日本語」は有効であると言える。

また、後期のゼミ活動で行った、小樽美術館に飾る作品のキャプションを日本語化する取り組みで、実際に文章を日本語化する作業を行ったことで日本人が「やさしい日本語」を活用するメリットを感じることができた。それは、自分の用いている日本語に無駄が多くあると気づけることである。難易度の高い日本語を実際にやさしい日本語化していくと、「とても」や「ほど」等、文章を理解する上で入れなくてもよい言葉を使用しがちになってしまう。また、文章をわかりやすくしようとする意識が高まるにつれ、細かな説明を加えてしまうことで全体の文章が長くなってしまうことが多々あった。これらにより、文章における主軸や伝えたいことが埋もれてしまう。普段は何の違和感もなく使う表現であっても、やさしい日本語化したことで、逆に文章を分かりづらくしている曖昧表現や余計な文章が明確に表れた。これにより、普段書いている文章は、自分が思っている以上に文章理解に必要のない言葉の羅列で構成されていることに気づくことが出来た。余計な言葉を削除していくことで、より要点が明確化する。日本語を母語とする日本人が文章を分かりやすく伝えるために、やさしい日本語を活用することは非常に有効であると感じた。

ゼミ活動を通して得た発見は私にとって大きな学びとなった。しかし、現在の状況として「やさしい日本語」の認知度が低いということが問題点として挙げられる。「やさしい日本語」について学ぶ機会は非常に少なく、その実態について知る人は少ないのである。「やさしい日本語」は将来を担う子ども、高齢化に伴い増加する高齢者、今後日本にとって重要な存在となる外国人など、様々な人を対象としても有効なツールとして機能する可能性を秘めている。今後、より多くの人に「やさしい日本語」の存在と有効性について知ってもらうことで、「やさしい日本語」をより有効に活用し、誰にとっても日本をより生きやすい社会へと変えていきたいと考える。そこで、まずはバスや地下鉄など普段我々が目にするような場所に「やさしい日本語」に関するクイズやポスターを掲示する、役所などにおける手続きに関する説明書を「やさしい日本語化」して作成する、Google 翻訳の機能に「やさしい日本語」で翻訳できるようなシステムを加えるなど、様々な方法を用いて「やさしい日本語」の存在についてより多くの人に知ってもらいたいと感じた。

やさしい日本語の使い方

小野佑香

このゼミを履修して、「やさしい日本語」と触れ合い、学んできたが、「やさしい日本語」は世の中にもっと浸透するべきだと感じた。やさしい日本語は日本語を学習している外国人、耳や文章を理解する能力に障害を持つ人など、様々な場面で使うことが出来る。やさしい日本語についての本を読み合わせて発表した時の内容でいえば、未成年出産した女性の市役所での手続きである。思い出したくない記憶と向き合わなければいけない、なおかつ難しい単語が並ぶ市役所の手続きは、彼女にとって相当苦しいものであったと思う。しかし、やさしい日本語はそういった場面でも寄り添うための道具になることが出来るのである。また、日本語を学習している外国人に向けてという点だと、個人個人の語学力レベルに合わせて、使い分けることで語学力をアップさせることに繋がるということを実感した。

また、やさしい日本語はただやさしいだけでは使いづらくなるということも学んだ。日本語を母語とする我々日本人が文章を読む時に、すべてひらがなで表記される場合よりも、ある程度は漢字・ひらがな・カタカナが混ざっている方が読みやすいということを、このゼミで学んだ一年間で感じる場面が多かった。どの言語も学ぶ上で大切にしていることは「いかにネイティブの様に使うことが出来るのか」ということである為、学習段階が初歩の初歩である場合はまだいいが、レベルが上がるにつれ「表記」よりも「語彙の難易度」に重きを置いた方がやさしい日本語をうまく使えるのではないか、という風に感じた。

そして、学習段階だけでなく、やさしい日本語を使って「一番伝えたいことは一体何なのか」ということも見極めることも重要なポイントであるという風に感じた。やさしい日本語は、先程述べた「語彙の難易度」もやさしい日本語に直すうえで、重要な視点になるのだが、「いかに簡潔に重要な点を伝えるか」という視点もとても重要である。やさしい語彙ばかりを使って、長々と文を繋げてしまうとどこかで解釈の違いを生み出してしまう危険性もあり、単純に「この人は、一体何を伝えたいのか」という疑問も生まれてしまうからである。これらを踏まえ、私たちのペアは、美術作品のキャプションをやさしい日本語に変換する際に、図や絵、写真を使うことを選んだ。言葉で説明するには難しいものもあるため、そういった場合は「いかに簡潔に重要な点を伝えるか」という視点に乗っ取って、誰が見ても一目でわかるような工夫を取り入れた。そうしてみたところ、圧倒的に分かりやすく、見やすくもなって良い工夫であったのではないかと感じる。

上記で述べたのは外国人の日本語学習者向けの工夫だが、障害を持つ人々への配慮についても考えてみた。障害を持つ人へ向けるやさしい日本語において、重要なポイントは「日本語をどのようにどこまで母語として学んだのか」という点である。幼いころから耳が聞こえない人だと、音での認識はほぼ無いため文字を見て理解することに重きを置く。その場合には、あまり複雑な書き方をすることなく、外国人学習者同様に、簡潔で簡単な表記で表す必要がある。

それに比べて中途失聴の人は音でも理解する能力がある為、ネイティブが使う日本語に近づけたほうが分かりやすい場合もある。これらのことから、「やさしい日本語」は単にやさしくするのが、やさしい日本語になるのではなく、個人個人にあったやさしい日本語に直すことが、正しい使い方なのではないだろうか、と考えた。

また、この授業を通して、他の人の意見や案を聞いて考えることの重要性も改めて感じることが出来た。一人だけで考えを深める時間も重要で、自分の中での発見も大事なことではあるのだが、それだけでは価値観や考えがある一点に凝り固まってしまう。このゼミでは、それをみんなで共有する時間もたくさんあって、とても勉強になった。私では思いつかなかったことや、考えもしなかった視点からの意見が聞けるので、自分の考えをより深めて、より良い案を生み出すことに繋がるのだと強く感じた。そして、実際に現地を訪れて雰囲気を掴むことも大事だとも感じた。「だいたいこんな感じだろう」と憶測で行動すると実際と違うことが多々ある。話を聞いてもある程度は想像できるが、それも想像の範囲内である為、事実と異なることがある。だからこそ、夏に実際に小樽市美術館を訪れて、作品に触れてみて、それも踏まえた上でキャプションの作成に生かすことが出来たと思う。これからもそういった周りの意見・実際の状況や雰囲気を大事に、卒業論文に活かしていきたいと考える。

日本文化専門演習Ⅱ最終レポート

坂本彩華

後期のゼミでは主に、小樽美術館に飾る絵の説明書きを「やさしい日本語」に直す作業を行った。この作業をしていくなかで気づいたのは、美術作品の説明は「快活で」など感覚的な表現が多く、やさしい日本語に直すのはかなり難しいという点である。また、このような簡単な言葉に直すことが難しい単語は、簡単な言葉に直そうとすると文章が長くなりがちになる。たとえば、版画は「木や石に色がつくところとつかないところがあります。その後に、紙に写したものです。」と説明することができるが、元々の言葉よりも長くなってしまう。そのため、単に単語を簡単に言い換えるだけでは、逆に文が長くなってしまう。文が長くなると、結局何が言いたかったのか分からなくなる。そうならないためには、文章をしっかり読んで、その文章では何を伝えたかったのか理解する必要がある。その上で、単語を簡単にするのではなく、文章ごと簡単にすると、理解しやすい文章になる。

また、文章の構成にも注意が必要である。補足的な部分や発展的な部分が途中で入って来ると、一番伝えたい部分が伝わりにくくなってしまう。そのため、伝えたいことを先に書いて、補足的な部分などは、後にまとめて説明するなどの工夫が必要である。しかし、文章を簡単に

しすぎると、下手な日本語になってしまう場合がある。そのため、その文章を読む人のレベルに合わせて、どのくらい簡単にすれば伝わりやすいか考える必要がある。

また、後期のゼミでは、障がい者福祉におけるやさしい日本語についても学んだ。やさしい日本語とは、だれでも参加できる社会にしていくための一つの方法である。やさしい日本語は外国人の日本語学習者以外にも有用なコミュニケーションツールであう。誰でもというのは、障がいがある人も、ない人も、子供や高齢者も外国人もという意味である。そのため、理不尽な不平等が生じないように配慮が必要である。しかし、障がいのある人と言っても、障がいには様々なものがあるので、配慮する相手に合わせた配慮の仕方がある。例えば、知的障がいのある人には、文字で伝える場合は、短い文章で伝えるなど、「やさしい日本語」は有用であると言える。しかし、聴覚に障がいがある人は、日本語を簡単に伝えるというよりも、音声アナウンスなどを紙に書いたり、口の形が見えるようにしたりなどの配慮が必要である。このように、障がいのある人と一括りにするのではなく、どのような障がいがあるのかを理解して、その人に合わせた配慮が必要となる。また、例として、「知的障がい」や「聴覚障がい」のある人への配慮について取り上げたが、「知的障がいのある人にはこうする」ということではなく、あくまで配慮を必要としているその人個人を理解することが大切であると考える。なぜなら、知的障があるからといって、全員が同じというわけではなく、個人差があり、本人が必要としていない場面での過剰な配慮は、傷つけてしまう可能性もあるからである。このように、どのような配慮を行うのか、どの程度の配慮が適当か、そもそも配慮を必要としているのか、相手を理解して見極める必要がある。よって、やさしい日本語を使うべきか、使わないべきかも、その場面や場合によって使い分けを行うべきである。

やさしい日本語について学んで気づいた問題点は、不特定多数の目に触れる場合、どの程度やさしい日本語化するかという点である。例えば、ある程度日本語を理解できる日本語学習者が対象の場であることがあらかじめ分かっていれば、そのレベルに合わせて「やさしい日本語」に直すことができる。しかし、その対象が分からない公共施設などでは、どのレベルに合わせるべきかという点が問題である。そうなった場合、すべての人が平等である社会とは言い難い。このような点からすべての人が平等であるということは難しいことが分かる。しかし、すべての人が生きやすい社会に近づけるためには、やさしい日本語以外にも、点字や、英語や中国語、音声など様々な配慮を組み合わせて、より多くの人が不利にならない配慮をしていかなければいけない。やさしい日本語についても、不特定多数の人の目に触れる場であれば、やさしめに設定するべきであると感じる。

最後に実際に難しい文章をやさしい日本語にしてみて感じたことは、思っていたよりも、簡単で適切な言葉が思いつかず、かなり難しいということである。言い換えの言葉が思いついても、やさにちチェッカーに文章を入れてみると、難しい単語であったりした。また、どこが重要な部分であるかを考えるという作業を通して、文章理解のスキルも上がったのではないかと感じる。

日本文化専門演習で学んだこと

新谷光静

はじめに

本稿では日本文化専門演習の 1 年間で学んだことをまとめ、振り返る。このゼミでは、丸島先生 のもと、主にやさしい日本語に焦点を当てて、さまざまな活動を行ってきた。それらを時系列的に 振り返り、この 1 年の学びを総括したい。

やさしい日本語の発表

前期ゼミの冒頭では、「やさしい日本語」に関するテーマをそれぞれ選択し、発表を行った。自分は 5 回目の講義で、「リーディングチュウ太」とはどんなツールかについて発表した。リーディングチュウ太は、インターネット上のツールであるので、実践を多く交えながらの発表であった。発表の準備の際に、実際にこのツールを使用してみて、文章の翻訳や、レベル判定などができ、実用的なツールであると感じた。また、読解教材も、ツール内で紹介されており、日本語教師だけでなく、日本語学習者にとっても利用する価値のあるものであると感じた。しかし、サイトのデザイン が不明瞭だと感じることもあり、よりよいデザインで構成できれば、より利便性の高いツールになると感じた。

しかし、その要望を叶えたかのようなツールが存在した。私の次の発表で取り上げられた「やさにちチェッカー」である。ツール内に文章を入力すると、自動で語彙、漢字、硬さ、長さ、文法の 5 項目で、それぞれ 5 点満点、合計 25 点満点で評価してくれる。合計点数に応じてランク分けもしてくれるため、文章全体がどの程度のレベルなのかが、一目瞭然なのだ。また、単語ごとに色分け もしてくれるため、レベルに合わない単語を書き換える際もスムーズに行える下記的なツールで ある。私は、以降の講義内でも多用しており、このツールが日本語教育において、重要な助っ人的役割を果たしていると考える。本講義でやさしい日本語に出会うまで、このような便利なツールがあるとは全く知らなかった。このツールに依存しすぎることはよくないだろうが、駆け出しの日本語教師のミスを減らしたり、正しい資料作成に役立ったりと、とても重要度の高いツールであると考える。

小樽課外学習

前期末には、市立小樽美術館での課外学習を行った。実際にたくさんの作品を観て、多くの作品に、作者の思いが込められたキャプションがあり、やさしい日本語でその言葉を届けることは少し難易度が高いと感じた。

実際に多くの作品、そのキャプションを観て、ただでさえ作者の意図していることを汲み取ることが難しい場合もあるのに、それをやさしい日本語に変換するということは、自分たちは想像以上 に、難しいことに取り組んでいるのかもしれないと考えさせられた。また、このよ

うな観点から芸術作品を観れるという新たな世界を、作品ではなく言語側から与えられたことに、言葉の持つ大きな発展性を感じた。

やさしい日本語への変換

少し遡るが、6 月後半の講義では、中村善策の絵のキャプションをやさしい日本語に書き換えた。ゼミ生の中では、自分と異なった表現を用いている人もおり、他人の書き換えを見ることで、 知見が広がった。また、自分は日本語教育ボランティアに参加していたこともあり、多少難解な言 葉の使用があったものの、初級学習者にも伝わる内容に変換できたと思う。しかし、文章構成な どは、入れ替えた方が理解しやすくなる場合もあると感じた。やさしい日本語に書き換える際に、そのままの語順で書くと不自然になることがあったからだ。

日本文化専門演習Ⅱに突入してからは、さらに多くのキャプションのやさしい日本語への書き換えを、山田さん監修のもと行った。私はジャンさんとペアを組んで、この課題に取り組んだ。彼と共同作業する上で、彼の日本語に対する認識に、少なからずいい影響を与えられたように思 う。また、私にとっても外国人が日本語をどのように捉えているかなど、肌で学ぶことができた貴重な半年間であった。書き換えについては、かなり多くの添削指導を受け、自分のやさしい日本 語への理解がまだまだであることを実感した。特に単語の難易度が下げられないままであることが多く、やさしい日本語のレベルに合った単語のチョイスに苦戦した。私は学外の活動として、日本語教室のボランティアをしており、日本人と話す時に使用する単語、文法では伝わらない表現 を相手のレベルに合わせて変換し話すことについては、他の学生より積み重ねてきた自信があった。しかし、今回の課題は、自分で考えた言葉の変換ではなく、他の人が考えた言葉、ましてや、専門的な用語や、日本人でも難解と感じる言葉を使用した文章が多かったために苦戦したと分析している。悪戦苦闘しながらも、丸島先生や、山田さんの協力を得て、修正に修正を重ね、 最終的には満足のいく仕上がりにできたと感じる。

さいごに

ゼミでの 1 年間の学習を通して、「やさしい日本語」とは何か、どのように使うことが有意義であるか、そしてやさしい日本語を届けることの難しさを実感した。特に、絵のキャプションをやさしい 日本語に書き換える作業は、数作品に渡って行ったため、非常にやさしい日本語への理解が深まった。また、作業を進めていくうち、この単語はこの言葉に置き換えられ、そのレベルはおよそこれくらいだろうという感覚が、研ぎ澄まされていったように感じる。個人的にこの力は、現在取得中の日本語教員養成過程においても、十分に生かせるものであると考える。

日本文化専門演習　期末レポート

南原あこ

市立小樽美術館を訪れて

市立小樽美術館は、小樽の作家の作品を数多く展示しており、その作風は様々で興味深い作品ばかりだった。作家や作品のキャプションが必ず作品と一緒に展示しており、作者の生い立ちや作風がわかり、より作品の魅力を感じることができた。今回鑑賞したように、まずはキャプションを見ずに感想を挙げ、その後キャプションを見て感想を挙げると、見る前と見た後ではその作品のイメージの変わった。そのため、美術館におけるキャプションは非常に重要であることがわかった。よって、やさしい日本語を必要とする人々も、作品を楽しく鑑賞することができるようにしなければならない。また、最近になってインバウンド、外国人観光客が増えている。コロナ対策が緩和され、これからますます外国人が増えると考えられる。そのためにはこのやさしい日本語化が役に立つだろう。

グループワークを通して

グループワークで絵のキャプションをやさしい日本語に変換する際は、やさにちチェッカーを活用し、何度も書き直しては、やさにちチェッカーにかけることを繰り返した。この作業を繰り返すうちに語彙や文がわかりやすいものになっていき、より良い文章を作成することができた。やはり、やさしい日本語化するときにはやさにちチェッカーは重要な役割を果たしてくれるツールである。しかし、漢字はひらがなに直した方がわかりやすい場合と、そのまま漢字の方がわかりやすい場合が存在する。そのまま漢字の方がわかりやすいのは、漢字圏から来た人や、単語で覚えている人などの場合である。このように判断に迷ったときにはグループで相談し、美術館の利用者層に合わせることにした。また、やさにちチェッカーにかけて難しい語彙として認識され、そのほかに言い換えができない語も多数あった。それは「モノタイプ」や「版画」などである。美術館のキャプションに多用される美術用語などは、言い換えが効かないことが多いため、注釈をつけるなどした。このように、やさしい日本語化するとき、使われる場面によって語彙などは注意しなければならない。

やさしい日本語と SDGs

やさしい日本語は、SDGs の教育や福祉の観点から考えることができる。ゼミ後半では、障がい者福祉の視点から優しい日本語の活用を考えた。やさしい日本語は、様々な障がい者福祉に役立つことがわかった。知的障がいと発達障がいについては短くわかりやすい文章で伝えること、同音異義語と比喩表現に留意すること。聴覚障がいについては、さまざまな障がいの分類があることと、助け合うこと。強度行動障がいはその人の強みや良いところを積極的にみつけること。以上のように、まずは障がいの特性について知ることが大切だ。やさしい日本語は外国人だけでなく、障がい者支援においても活用できる。やさしい日本語は語彙や文型を簡単

なものに直して伝える。それは、使う場面や相手によってその語彙や文型も異なり、伝え方も重要であると考えた。

1 年間のゼミの活動を通して

1 年間ゼミでやさしい日本語について学び、実践を通してその学びをより深いものにできた。外国人に物事を伝えるとき、その人の国の言葉を話すことができなくても、やさしい日本語を使うことで相手に伝えることができる。やさしい日本語は、日本人ならば誰でもできる、易しい語学だといえる。しかし、実践を通して感じたのは、普段何気なく使っている言葉は意外と難しい言葉ということだ。それをやさしい日本語にするには、さらに語彙力が必要であると感じた。キャプションを作成した際には、グループで話し合うことで難しい表現もできる限りやさしい日本語にすることができた。どう直したらわかりやすいかを常に考えて磨き上げた。このように、やさしい日本語は、相手がわかりやすいかを常に求め続ける語学であることがわかった。よって、やさしい日本語は伝える側の思いやりである。やさしい日本語は、やさしい心を持って向き合う必要がある。

やさしい日本語について学んだこと

八田愛生

後期のゼミではグループワークで通常レベルの日本語の文章をやさしい日本語に直す作業を中心に行った。その作業の中で、実際に作業することでしか気が付かなかっただろうと感じることが多かったように思う。まず、常に感じていたのは「推測することの難しさ」であった。例えば、文法として「～なようです」や「～できるなら」というように、私たちが何も難しく感じない部分でも、日本語学習者にとっては伝わりにくい内容であるということに困惑した。難しくないものを簡単にする、ということは、日本語が堪能な人にとってはむしろ違和感を覚えるような回りくどい言い方になる場合もあるということに気が付いたからである。また、「版画」、「油絵」、「モノタイプ」などの美術で使われる特有の単語については日本人だとたいていその単語だけで大体こういうものであると想像がつくものなので言い換えが難しかった。このように、説明が必要だとは思ってもみない固有名詞や文法を簡単に説明しようとすると、それがいかに難しいことであるか考えさせられた。このような小さな具体例に見るように、これは難しそうだなと自分たちが推測する単語以外の、私たちが普段何気なく使っている日本語が相手に伝わっているどうかを推測するという行為が「やさしい日本語」に直すときの基礎であり、課題であるように思う。私にとっては、その基礎の部分から躓いてしまったよう

に感じ、「やさしい日本語」を使いこなす難しさを感じた。しかしそれと同時に、配慮の大切さも改めて感じることができたと思う。

さらに、「やさしい日本語」に直すという作業の全体を通してもう一つ学んだことがある。それは、「誰にどの程度伝えたいか」、「どこを一番伝えるべきか」というめどを立てることの重要性についてである。例えば先述の例のように、「油絵」のという単語については漢字で何となく意味が伝わる場合もあれば、全く理解できない日本語初心者の場合もある。私たちのグループはすべてを丁寧に砕いて説明する方法よりも、美術館に来る人がどのような人物であるかを想像して、ある程度「油絵」を読み取れる人であるという前提で文章を構成した。作業の初めの方は、自分たちがどこまで相手に寄り添った文章を作るかで悩むことが多かったので、このように想像を巡らせることである程度の方向性を決めていった。元の文章を読んだときに、「誰にどの程度伝えたいか」、文章の中で「どこを一番伝えるべきか」を決め、その大枠からはずれないようにしないと迷ってしまうということにこの作業をして改めて気が付かされた。

最後に、講義の全体を通して学んだことがある。それは、「やさしい日本語」において最も重要なのは、相手が理解できない可能性を考え、理解できない状況に寄り添うということである。実際に重要なのは、「やさしい日本語」の質よりも、伝えようとする意志であると感じた。最初は「やさしい日本語」を使ってわかりやすく伝えようと思っていた。しかし、作業を続けていく中で、少しでもわかりやすく多くの情報を伝えようとする手段として「やさしい日本語」が用いられるのだと思うようになった。それには、今回でいうと「美術館で小樽の芸術家たちの作品を見たい」という意図を持って来場した人にとっては、ただ観光に来た、またはただ景色を見に来たという方よりももっと深堀した助けが必要になることに気が付いたことが関係する。美術館の説明はどうしても専門的な用語が出てくるので、「やさしい日本語」で説明しようという意識だとどうしても元の文章の方がしっくりくるように感じてしまうことがあった。また、元の文章とあまりにかけ離れているとそれが良くない、うまくない文章であるような気もしていた。しかし、伝えたいことのめどを立ててから、これをどう伝えようかと考えた時に「やさしい日本語」を使って伝えたい内容を盛り込んだ文章を組み立てるとその方が伝わりやすい文章になっているように感じた。

日本語が難しいと感じる方に対しては、作品をただ説明しただけでは当然理解することが難しい。だからと言って短い文章にするだけでは伝えられる情報が少なくなってしまう。よって、「やさしい日本語」を用いることで画家の生い立ちなどの作品の背景までも知ってもらうことが可能になる。このことは、作品の魅力をより多く伝えることができるというメリットにもなると思う。「やさしい日本語」に直すという作業においては、相手が日本語がわからない可能性を常に考えて、どうしたら伝わるのか、なにを伝えたらよいのかを常に考えて文章を組み立てた。その中では推測して文章を構成する難しさを感じただけでなく、展示者側が伝えた

い内容と、作品を見る側が知りたい情報との間に立って難しさを緩和するという認識以上に、配慮する心を表す手段としての「やさしい日本語」であることを意識することになった。

大学生と〈やさしい日本語〉

平塚涼

1. はじめに

約 1 年間のゼミを通して、私は何を学び、どう成長したのだろうか。コロナ禍で人と接する機会が減っていく中、少人数で楽しく学びを深める場は大変貴重であり、新たな発見の連続であった。丸島ゼミの主な活動内容としては、今年の 3 月に行われる小樽美術館での展覧会に向けて、〈やさしい日本語〉の歴史や理念、文法などを学び直すところから始まった。そして、学んだ知識から、展示予定である美術品の難しい解説文を〈やさしい日本語〉化し、全ての人にとって読みやすい文とは何かをひたすらに考え続けた。本レポートでは、ゼミでの活動から得たものは何か、そこから見えてきた課題を述べていきたい。

2. 知識としての〈やさしい日本語〉

第 1 学期の第 2 回～第 5 回の講義に渡り、〈やさしい日本語〉について、振り分けられたテーマのレジュメ作成と発表が行われた。日常生活の中でなんとなく聞いたことがあった〈やさしい日本語〉も、知識としては至らない部分が多く、驚くことも多かった。例えば、私は〈やさしい日本語〉の歴史を発表したが、今後の展覧会準備に向けて重要だと感じた規則があった。それは、「〈やさしい日本語〉にするための 12 の規則」である。

① 簡単な語を使う
② 1 文を短くして文の構造を簡単に
③ 災害時によく使われることば、知っておいた方がよいと思われる言葉はそのまま使う
④ カタカナ・外来語はなるべく使わない
⑤ ローマ字は使わない
⑥ 擬態語や擬音語は使わない
⑦ 使用する漢字や、漢字の使用量に注意し、漢字にはフリガナを振る
⑧ 時間や年月日を外国人にも伝わる表記にする
⑨ 動詞を名詞化したものはわかりにくいため、動詞文にする
⑩ あいまいな表現は避ける
⑪ 二重否定の表現は避ける
⑫ 文末表現はなるべく統一する

上記の規則は、どんな文を〈やさしい日本語〉化する場合にも守るべきものであり、ただ平仮名に直すだけ、フリガナを振るだけでは足りないということがよく分かった。また、他のゼミのメンバーの発表から得る知識も多く、特に「やさにちチェッカー」というツールを知ったことで〈やさしい日本語〉化する作業がスムーズになった。

3. 美術品と〈やさしい日本語〉

災害情報や生活情報の発信に用いられることが多い〈やさしい日本語〉であるが、丸島ゼミでは、第1学期の第5回以降、美術品の解説文を〈やさしい日本語〉化することに注力した。美術品の解説文というと、堅苦しいイメージがあり、日本語を母語とする人でも理解が難しい表現も多く含まれている。今回は、小樽美術館に務めている学芸員の山田菜月さんのサポートもあり、作者の制作当時の気持ちや絵に込められた思い、専門用語もなども汲み取ることができた。私が解説文を易しく分かりやすく書き直す上で学んだことは2つある。

1つ目は、いかにニュアンスを変えず、伝わる言葉に変換するのかである。例えば、「生まれ変わる」という言葉を〈やさしい日本語〉化するとしよう。「生まれる」と「変わる」が組み合わさっているため、変換する言葉よっては違う伝わり方をしてしまい、語彙としての難易度も上がってしまう。この場合は、語彙･漢字･硬さを考慮し、「また生まれる」という表現に変換した。しかし、〈やさしい日本語〉は、誰が訳すのかで別の表現になる場合もあるため、この変換が正しい･間違っているということは無いと考える。人それぞれの特色が見えるのも面白いである。

2つ目に、メンバーとの連携の重要性である。1人で考えるには、言葉のボキャブラリーに限界があり、いくら頭をひねっても同じ言葉ばかりが出てきてしまう。しかし、共に課題と向き合うメンバーがいることで、客観的な意見を取り入れ、よい〈やさしい日本語〉を生み出すことが出来たのだ。また、自分の言葉が採用されることで、〈やさしい日本語〉化する力が付いてきていることを実感でき、自信にも繋がったといえる。

4. さいごに

丸島ゼミでの活動を通して、このゼミの中にいるメンバーの〈やさしい日本語〉についての理解は確実に深まったが、母語を改めて学び直そうと考える人はごく僅かであり、まだ〈やさしい日本語〉は浸透していない。現在、「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」の目標10に人や国の不平等をなくそうという記載があるように、目指すべきは日本国内の「言葉のバリアフリー化」である。コロナ禍で観光客は一時減少傾向にあったものの、少しずつ回復傾向にある今こそ、誰もが住みやすい街づくりが必要である。

また、このゼミのメンバーは皆学習意欲が高く、常に「競争心」を感じながら勉強に励むことができた。誰かに流されるのではなく、全員が平等に意見を言える環境であり、楽しいと思える約1年間を過ごせたと思う。今年の4月からは卒業論文に本腰をいれて活動をしていくこ

とになると思うが、悩むことがあれば相談出来るメンバーに出逢えたことが1番の成果だと感じる。

〈やさしい日本語〉の新しい視点

藤野戸柾希

私がこのゼミで学んだことは、「やさしい日本語」の実践方法と相手の視点に立つ重要性である。

前期のゼミで「やさしい日本語」についての概要や現状を知り、実際の作り方を学んできた。後期では、前期のゼミで学んだことを活かして、美術品のキャプションをやさしい日本語に置き換えて、第三者にも見られる形にした。今回のやさしい日本語の書き換えは、外国人に読んでもらうことを想定して行ってきた。はじめは、どの語彙が難しいか、どの文法が難しいか、手探りの状態だったため、なかなか思うように書き換えをすることができなかった。日本語が母語である人にとっては、文章に連用中止を用いることや、間接的な表現や曖昧な表現を使うことは普通のことである。私たちが日常生活で話したり、読んだりする文章にはこういったものがありふれていると改めて感じた。

キャプションをやさしい日本語に書き換える上で一番重要だと考えたことは、相手の視点に立つことである。やさしい日本語の置き換えの経験が少なく、母語が日本語である私にとっては、やさしい日本語に置き換えるときに、どうしても自分の中だけだと限界があると感じた。母語が日本語であると、相手、外国人にとってどの言葉が分かりやすいかの判断が難しい。自分の中では最適解だと思っていた言葉も相手にとってはわかりづらかったり、逆に自分の中で不適切だと思った言葉が相手にとってはわかりやすい場合もある。自分の中で迷ったときや、困ったときは相手の視点に立つことを心掛けた。今回、ペアやグループでやさしい日本語の置き換えに取り組んだが、私の相方の母語が日本語でなかったため、そこの視点が非常にためになったし、やりやすかった。日本語話者同士だと、その視点がないため、キャプションを作るのがより難しいと感じた。基本的に、やさしい日本語の書き換えは文章だけを見て行うものだと思っていた。今回は、やさしい日本語の書き換えの対象が美術品のキャプションであったため、美術品をよく観察する必要があった。美術に対しての知識がなかったため、専門用語の変換や実際に絵を見て、それを言葉に表すことが難しかった。稀にやさしい日本語に変換することがどうしても不可能な言葉があった。やさしい日本語に書き換えをするときに、変換の明確なルールは決まっていないため、同じ単語でも書き手によって異なったり、同じ単語でも文章によって意味が変わったり、そういったところが「やさしい日本語」の難しさだと思った。また、専門用語をやさしい日本語に変換するのか、そのまま残して脚注をつけるのかなど、これらの問

題をどのように対処して、どの方法が一番わかりやすいかを見つけることが今後の課題であると思う。

ゼミの後半では、SDGs と障がい者福祉と「やさしい日本語」の関係性についてみてきた。今まで私は「やさしい日本語」について、主に外国人のためのツールとして活用されていると思っていた。しかし、SDGs と障がい者福祉の観点からみると、高齢者や障がいのある人、子どもなど、社会的に孤立し、コミュニケーションに問題がある人にも「やさしい日本語」が役立つと意識することができた。日本人同士でも世代間によって使う言葉や必要な知識は異なり、互いが対等に会話するには配慮が常に必要である。スマホネイティブ世代・デジタルネイティブ世代の若者と高齢者では話が通じないことが頻繁にある。私も祖父母が身近にいるため、このような経験を味わったことがある。また、障がい者にも「やさしい日本語」が有効であることを初めて知ることができた。それぞれの人の特徴や特性に合わせて、その人の課題に注目するのではなく、受け入れる環境づくりが大切である、ということを学ぶことができた。このゼミを機に、「やさしい日本語」の在り方について、改めて考えることができた。

本ゼミでは、外国人に読んでもらうことを想定して、美術品のキャプションをやさしい日本語に書き換える作業を主に行った。また、SDGs と障がい者福祉について学んだ。やさしい日本の書き換えにおいて重要なことは、相手の視点に立ち、相手を思いやる気持ちであると感じた。「やさしい日本語」の対象は外国人だけではなく、高齢者や子ども、障がい者の方たちにとってもわかりやすい日本語である。今後は、今回のゼミで学んだことを活かして、卒業論文のテーマにも挙げたように対象を高齢者に絞って、高齢者にとっての「やさしい日本語」について研究していきたい。

期末レポート

ボウ シゲン

「やさしい日本語」、これはこのゼミで初めて聞いたことばである。日本人は母語として国語教育を受けたが、システム的な日本語教育をほとんど受けていないから、外国人や子どもなどの需要者に「簡単に意思伝達できるように」しようとしても、どれほど「簡単に」言った方がいいかわからない。むしろ人として、外国人の方が相手の場合、英語で話そうとする傾向が、日本でも中国でも非常に高い。相手に日本語能力が把握できない状況では、比較的に使える言語に移ることが当然合理的な考えである。私はそれを悪いことだと思っていない。

しかし、大学 3 年の前後期、一年間やさしい日本語化する練習をしているうちに、「簡単に」言えることは、たとえ日本語教育を受けた私にしても、思った以上に難しいと実感した。日本語の勉強を始めた頃、初級の考え方が、自分の耳が上級日本語に慣れ親しんだうちに、消

え去ってしまった。今の私にとっても、どれほど「簡単に」言った方がいいか、ほぼわからなくなった。日本人と日本語上級者にとって、教育者として需要者との接触、または初級者を教える経験が日常的にないと、この文を何と言い換えればいいか、適当なことが思いつかない。これも一般人がつい英語での交流に移る傾向がある原因である。なので、「やさしい日本語」の開発の目的として、簡単に意思伝達、その目的を達成するために、学習者と教える側、どちらかが一方だけ努力するだけでは達成できない。学習者は日本語を聞き取れるように頑張って勉強して、教える人たちも相手が聞き取れるように言葉遣いに配慮する、両方ともその目的を目指して頑張らないと、実現することは難しい。ゼミを通して、私はそう思っている。

今私たちがしていることは、例え小さな努力も、誰かに役に立てると思っていた。しかし、根本的に言うと、私たちは将来教師になったり、初級者と接触があったり、もしくは関連する仕事をしないと、この項目でできることはここまでだ。だから、需要者と接触する機会を作ることは大事だと思う。単にどこか一つの地域ではなく、全国で全体的に「そのためにする」意識を受け入れる雰囲気を作ることも重要である。しかし、対象が外国人の多数の集団なので、しばらく排外意識を取り除けない状況では、例え何かをしても、私のような同じ外国人しかやらないかもしれないし、結局実践することも難しい。ここまでで、私にもいい案がうまく思いつかない。

あと残りは、去年 7 月末の美術館参観である。正直に言うと、私も一言で絵には何を描いてあるか、何かを表現したいか、うまく言えない。芸術に才能がないかなあと思っている。でも、今技能を何も持っていない自分にしても、このぐらいのことができるから、今までしたことを 3 月辺りに展示することになって、少なくとも役に立てることが嬉しい。将来、また何かを試す勇気が出ると思う。

日本文化専門演習Ⅱ　期末レポート

渡邊樹衣奈

私はゼミでの活動で二つのことを学んだ。一つ目は、＜やさしい日本語＞そのもののことだ。このゼミに参加するまで＜やさしい日本語＞を聞いたことがなかった。しかし一年間学んだ結果、＜やさしい日本語＞をもっと普及させるべきだと実感した。学んだことの二つ目は、対象者の気持ちを考えるということだ。＜やさしい日本語＞をただ使えばいいということではない。本当に＜やさしい日本語＞を使うべきなのか。そもそも日本語を使うべき場面、または英語を使うべき場面など言語の使い方についても考えさせられた。以下では、二つの学んだことに対して詳しく述べる。

まず、一つ目の＜やさしい日本語＞についてだ。ゼミに参加する前の印象としてただ簡単で簡潔な日本語のことを＜やさしい日本語＞というのだと思っていた。しかし、学びを進めるにつれてさまざまな規則があり、日本語母語話者の思う「わかりやすさ」と＜やさしい日本語＞対象者の思う「わかりやすさ」は違うということがわかった。ゼミ生の八田さんの発表によると、文字言語と音声言語に分かれて考えられている。例えば、日本語母語話者にとって漢字が適度に使われている方がわかりやすい。しかし、それ以外の人々はひらがなも適度に使われ、難しい漢字は使われていない方がわかりやすい。また、音声言語に注目する。日本語母語話者にとっては自然な速度や間、イントネーションは重要だ。しかし、それ以外の人々はゆっくりはっきり話されること、また身振り手振りを加えるとより分かりやすい。他には「＜やさしい日本語＞にするための 12 の規則」が存在し、形式的に＜やさしい日本語＞が作られているということがわかった。さまざまな言語に構文やルールがあるように＜やさしい日本語＞にも規則がある。ただ簡単で簡潔な日本語なのではなく、規則に沿って作成する必要があるということを学んだ。

二つ目は、対象者のことを考えるということだ。私は、ジーユーでアルバイトをしている。最近は新型コロナウイルスによる規制も緩和され、多くの外国人のお客様に利用していただいている。大学一年生からずっと働いているが、二年前と比較して明らかに外国人の方に接客することが増えた。その時、一番苦労したことが「言葉」だ。外国人には三つの特徴が見られる。一つ目は日本語で私たち日本語母語話者とほとんど障害なく会話できる人だ。この人たちに対しては一般のお客様と同様の日本語の使い方をして対応している。二つ目は日本語を少し理解することが出来る人だ。単語がわかっていても語順や難しい単語がわからないことが多い。三つ目はほとんど日本語がわからない人だ。「ありがとうございます」や「すみません」など世界でも普及している日本語は話すことができても日本語では会話ができない。この三つの特徴の中でも、二つ目と三つ目の特徴を持つお客様に対しては接客の仕方に気をつけている。さらに、二つ目の特徴を持つお客様への対応には＜やさしい日本語＞が有効的だ。

一か月ほど前に外国人男女のお客様に声をかけられた。様子を伺うと男性は日本語を少し話すことができ、理解もできるようだった。しかし、女性は日本語を聞き取ることは多少できそうだったが、話すことはほとんどできなさそうな雰囲気だった。そこで、私は＜やさしい日本語＞を使って接客をすることで二人に理解してもらうことができるのはないかと考えた。以下は、思い出す限りだが、会話内容である。

男：すみません。（スマホの画面を指しながら）これはどこにありますか。
私：はい。探すので少し待ってください。
私：すみません。（スマホの画面を指さしながら）これは（床を指さしながら）この店にはないです。
男：そうですか。では、同じコラボのものはここに置いていますか。

私：はい、置いています。教えます。

（移動する）

私：（コラボ商品のおいてある範囲を指さしながら）ここからここまでがコラボのものです。

男：わかりました。ありがとうございます。

女：ありがとうございます。

私がこの場面で気をつけたことは三つある。一つ目はなるべく短い文章で必要最低限の語数で会話をすることだ。丁寧さよりも伝わるということを心掛けた。二つ目はお客様が使った単語をなるべく使うことだ。例えば「ここに置いていますか」と聞かれた時、普段は「ございます」や「あります」と言う。しかし、「置いてありますか」と言ったということはこの単語は理解できるとわかるため、確実に伝わるように「置いてあります」と答えた。また、「コラボ」というカタカナ語もこのお客様は使っていたため、私もあえてそのまま使った。三つ目は身振り手振りを使うことだ。万が一、言葉で伝わっていなくても視覚で理解してもらえることもあるかもしれないと考えたため、手で表すことができる部分は意識した。その結果、会話に困ることなく、ご案内ができた。この時、私は改めて＜やさしい日本語＞の実用性について改めて実感した。

私は、このゼミの活動を通して＜やさしい日本語＞を普及させるべきだと考えた。また、＜やさしい日本語＞はインターネット等の情報を読んでも外国人向けのものだという認識が強い。外国人だけでなく、障がいの持つ方などにも有効的だということを広める必要があると考えた。

このゼミで学んだこと

ジャン ジェウォン（交換留学生）

久しぶりに日本に来たので、緊張して会話もよくできないし、聞き取りは自信があると思いましたが、話を理解するのが大変でした。でも、入国後、2 か月が過ぎたころは問題なく会話ができたのですが、食堂にはまだ知らない漢字が多かったので大変でした。

9 月に初めて北海学園大学に来て半年しか参加できなかった授業でしたが、留学生活動をした時唯一日本の大学の授業を感じることができた授業でした。最初に韓国と授業の時間、授業方式など様々な違いがありました。大田大学校では基本的に授業時間が 50 分、休憩時間 10 分形式で進行しましたが、ここでは授業時間が 1 時間半なので最初は不思議でした。韓国の大学では、このように小規模な学生でお互いに話しながら進める方式の授業がなく、1 学期の授業

が 2 学期につながる場合はありますが、途中でやめたり、他の授業に変更したりすることができます。

日本の大学の授業は、学生と話をする気持ちを感じました。日本文化専門演習の授業を初めて聞いた日、外国人や漢字が苦手な人のために難しい日本語を分かりやすい日本語に変える授業だと聞いて、今の韓国の状況について考えながら聞きました。韓国も漢字を全く使わないわけではないので、韓国語も難しい単語がたくさんあります。外国人はもちろん、どの韓国人も難しい単語の意味をよく理解するのが大変だと思います。

昔、高校生たちに国語の授業をしたことがありました。その時も難しい単語を使うと高校生の中で意味を理解している人が少なかった覚えがあります。このような経験があるから最初はとても私には易しい授業だと思いました。それ以外にも、私は外国人の立場として自分が知らなくて難しいと感じる単語は全部難しい漢字だと考えれば簡単なものでした。

しかし、思ったより簡単な授業ではありませんでした。最初に変える前には難しい漢字の意味を自分で知らなければ解釈することができなくて大変でした。ほとんどが初めて見る漢字だったし、家で毎日漢字を辞典で探しながら自分で毎日勉強をして授業に行きました。ほとんどの漢字はあまり使わない日本語で、とても難しかったです。それで、授業に行く前に分からない単語の意味調査、解釈、一人で易しい日本語に翻訳、この 3 つは毎日一人でやってから授業に行きました。一緒に授業を受ける日本人学生の友達が幸いにも私が下手なタイピングや発表など代わりにしてくれたおかげでとっても安心しました。確かに難しい単語や難しい文法をやさしい日本語に変えることなので、日本語会話や読解力がとても上がっているのを感じました。

最初に提出する前はこれよりもっと完璧にはできないと思いながら提出したんですが、一度に通過することはなく、これでもう終わりだと思った時はだんだんアップグレードされていく過程がとても不思議でした。努力して変えたら、たまに良いコメントが出る時はやりがいを感じました。

長くて長かったやさしい日本語で変える授業が終わった後に、次が論文作成だと聞いてびっくりしました。韓国語でも今書いたらできないので、また眠れない毎日が始まるのかなだと思いました。良かったのは、自分で作成するのではなく、他の学生たちの話題や内容を見るので、話を聞くのが好きな私にはいい経験でした。韓国の大学も日本の大学と同じように卒業するためには卒業論文を書かないと卒業ができないんですけど、私の学科では論文よりは資格証が大事なので論文を書かなくでも卒業ができて良かったと思います。みんなの論文の内容で自分が関心ある分野と気になる分野を知ることができたのでいい経験でした。その中には私も気になるようなおもしろそうな内容が多くて後で全部書いた内容を見たい論文が多かったです。

コロナもあるしあまり他の学生とは話をすることができなかったし、後悔することもいっぱいあったんですけど、一緒に勉強した友達とはよく会話することができたのでいい経験でした。来月になったら、もう帰るんですけど来る前に決めた計画ややりたかったものを全部叶え

ることができなかったのでちょっとだけは未練が残るんですけど、一番叶えたかったものはかなえることができたので良かったです。後にも機会があったらみんなと会うことができたらいいと思いました。短い半年でしたが今までありがとうございました。

過去の〈やさしい日本語〉の活動の記録は、以下の Web サイト等からご覧ください。

Web サイト：　https://sites.google.com/hgu.jp/yasajp/
note（Blog）：　https://note.com/hguyasajp
Twitter（活動報告）：https://twitter.com/HGUyasajp

Web サイト　note　Twitter

北海学園大学　人文学部　日本文化学科　丸島ゼミ機関誌

紐　帯　第 3 号

2023（令和 5）年 3 月 31 日　発行

発　行　者　北海学園大学人文学部　丸島歩研究室
〒062-8605　札幌市豊平区旭町 4 丁目 1-40